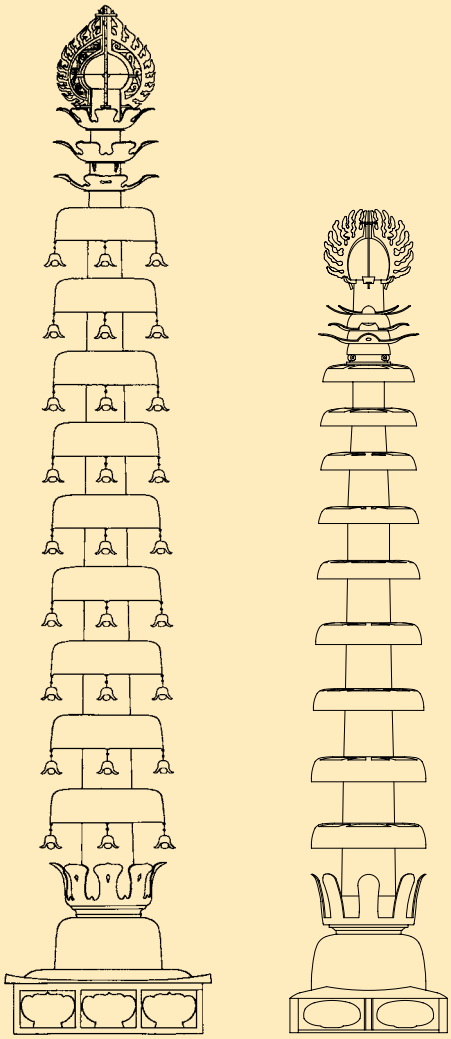
公益財団法人

和歌山県文化財センター年報

埋蔵文化財発掘調査と文化財建造物保存修理の記録

2012



1　和田遺跡　全景（北から）

2　和田遺跡　遺構205　土器出土状況

3　田ノ口遺跡　調査区１～３区　航空写真（南西から）

4　田ノ口遺跡　１区遺構９土坑　土器出土状況（東から）

5　長保寺大門　竣工

6　長保寺多宝塔　竣工

7　金剛三昧院多宝塔　竣工

8　熊野那智大社　竣工　被災した第五殿から第一殿を見通す

目　次

平成 24（2012）年度　受託業務一覧 …… 2
平成 24（2012）年度　受託業務所在地図 …… 3

埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物整理

平井Ⅱ遺跡の発掘調査…… 4
平井Ⅱ遺跡の第 2 次発掘調査 …… 5
根来寺遺跡の発掘調査…… 6
田ノ口遺跡の発掘調査…… 7
大古Ⅱ遺跡の発掘調査…… 8
田屋遺跡の発掘調査及び出土遺物整理…… 10
六十谷遺跡（第 2 次・第 3 次）の発掘調査 …… 11
立野遺跡の発掘調査…… 12
岩崎大泓・岩崎大泓Ⅱ遺跡の発掘調査 …… 13
和田遺跡の発掘調査…… 14
根来寺遺跡の発掘調査 2 …… 15
片山遺跡の発掘調査及び出土遺物整理…… 15
立野遺跡の出土遺物整理…… 16
井辺遺跡及び神前遺跡の出土遺物整理…… 17
神前遺跡の第 1 次出土遺物整理 …… 18
井辺遺跡の出土遺物整理…… 19
和田Ⅱ遺跡の出土遺物整理…… 19
小松原Ⅱ遺跡（湯川氏別館）の確認調査…… 20
名勝和歌の浦三断橋整備事業…… 20

文化財建造物の保存修理・耐震診断技術指導

国宝　長保寺大門ほか2棟の保存修理 …… 21
重要文化財　琴ノ浦温山荘主屋ほか2棟の耐震診断… 22
重要文化財
　金剛三昧院客殿及び台所ほか1基の保存修理 …… 23
重要文化財　丹生都比売神社本殿の保存修理…… 24
国史跡　熊野本宮大社神門ほか 4 棟の保存修理 … 25
重要文化財
　熊野那智大社第一殿ほか7棟の保存修理（災害復旧）… 26
国史跡
　熊野那智大社東門ほか2棟の保存修理（災害復旧）……26
世界遺産　熊野那智大社東門石階段周辺の保存修理 … 26
県指定文化財　深専寺庫裡の技術指導…… 27
登録文化財　火伏医院の技術指導…… 27
登録文化財　旧葛城館の技術指導…… 27

資料紹介

弥生時代前期の弓矢
　－立野遺跡で出土した弓の構造について－ …… 28
那智山坊跡出土の銭貨…… 30
長保寺大門での樹種分類について…… 31

普及活動

平成24年度の普及啓発事業 …… 33

センター概要

平成24（2012）年度概要 …… 37

巻 頭 写 真

1　和田遺跡　全景　（北から）
2　和田遺跡　遺構 205　土器出土状況
3　田ノ口遺跡　調査区 1 ～ 3 区　航空写真（南西から）
4　田ノ口遺跡　1 区遺構 9 土坑　土器出土状況（東から）
5　長保寺大門　竣工
6　長保寺多宝塔　竣工
7　金剛三昧院多宝塔　竣工
8　熊野那智大社　竣工　被災した第五殿から第一殿を見通す

例　言

1　本書は、公益財団法人和歌山県文化財センターが平成 24 年度受託事業として行った埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物等整理業務、文化財建造物の保存修理設計監理業務、および普及活動の成果をまとめたものである。
2　掲載した地図は、和歌山県教育委員会が発行する『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』2004 ～ 2006 年度（地図は国土地理院発行の数値地図 1:25,000 の複製）、および数値地図 1:25,000 の複製を一部加筆し引用した。また各自治体の発行する 1:2,500 都市計画基図を一部加筆し引用したほか、電子国土（http://cyberjapan.jp/）提供図の複製を用いた。
3　掲載写真・図面は、基本的に調査および整理中に撮影・作成したものであり、出典が異なる場合は個別に記した。また、本文中の所見は、調査・整理作業中のものであり、今後の作業の進展により変更する可能性がある。
4　掲載した座標値は、平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）による。
5　原稿執筆は職員が分担して行い、文末に執筆者名を記した。編集および概要原稿作成は、佐伯和也・森原聖・下津健太朗が担当した。

平成 24（2012）年度　公益財団法人和歌山県文化財センター受託業務一覧

埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物整理業務

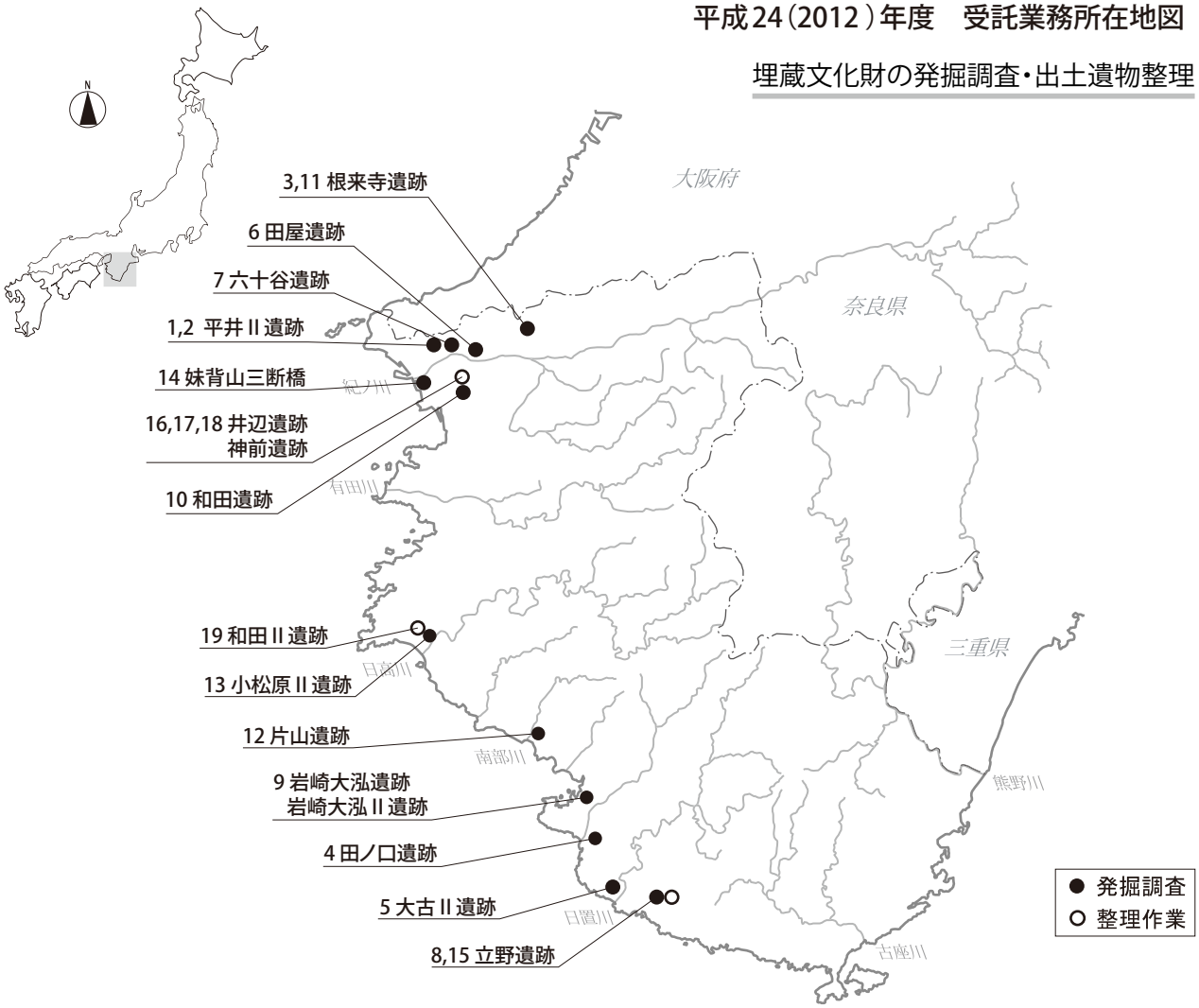
	受託業務の名称	所在地	契約期間	調査面積	委託機関等
1	一般国道26号第二阪和国道平井Ⅱ遺跡発掘調査業務	和歌山市平井	2012.05.22～2012.10.31	1,059㎡	国土交通省(近畿地方整備局)
2	一般国道26号第二阪和国道平井Ⅱ遺跡(第２次)発掘調査業務	和歌山市平井	2012.12.11～2013.03.15	670㎡	国土交通省(近畿地方整備局)
3	一般国道24号京奈和自動車道　根来寺遺跡(第２次)発掘調査業務	岩出市根来	2012.09.05～2013.03.15	2,345㎡	国土交通省(近畿地方整備局)
4 5	近畿自動車道紀勢線事業に伴う田ノ口遺跡・大古Ⅱ遺跡発掘調査業務	西牟婁郡白浜町十九渕・大古	2012.04.11～2012.12.25	5,268㎡	国土交通省(近畿地方整備局)
6	平成24年度大和紀伊平野農業水利事業(二期)紀伊平野区域(田屋遺跡)に係る埋蔵文化財の発掘調査	和歌山市田屋	2012.09.12～2013.03.29	333㎡	近畿農政局 和歌山県
7	都市計画道路西脇山口線(園部・六十谷)道路改良事業に伴う六十谷遺跡第２次発掘調査業務	和歌山市六十谷	2012.01.26～2012.07.31	408㎡	和歌山県
	都市計画道路西脇山口線(園部・六十谷)道路改良事業に伴う六十谷遺跡第３次発掘調査業務	和歌山市六十谷	2012.06.08～2012.10.12	104㎡	和歌山県
8	近畿自動車道松原那智勝浦線すさみ西インターチェンジ(仮称)事業に伴う立野遺跡発掘調査業務	西牟婁郡すさみ町周参見	2012.10.16～2013.03.15	1,249㎡	和歌山県
9	近畿自動車道紀勢線事業に伴う岩崎大泓遺跡・岩崎大泓Ⅱ遺跡発掘調査業務	西牟婁郡上富田町岩崎	2012.09.07～2013.03.25	2,293㎡	国土交通省(近畿地方整備局)
10	秋月海南線道路改良工事に伴う和田遺跡発掘調査業務	和歌山市和田	2012.08.01～2013.03.15	1,557㎡	和歌山県
11	史跡根来寺境内及び名勝根来寺庭園発掘調査業務	岩出市根来	2012.07.28～2012.11.20	80㎡	宗教法人真義真言宗総本山根来寺
12	南部高校クライミングウォール新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査等業務	日高郡みなべ町芝	2012.11.07～2013.03.20	126㎡	和歌山県
13	平成24年度湯川中学校改築工事に伴う小松原Ⅱ遺跡確認調査監理業務	御坊市湯川町小松原	2012.06.07～2012.09.10	300㎡	御坊市
14	平成24年度和歌の浦史跡等・登録記念物・歴史の道保存整備事業に伴う三断橋修理事業監理及び調査業務委託	和歌山市和歌浦	2012.06.20～2013.03.19	—	和歌山県
15	近畿自動車道紀勢線事業に伴う立野遺跡出土遺物等整理業務	西牟婁郡すさみ町周参見	2012.06.07～2013.03.25	—	国土交通省(近畿地方整備局)
16	都市計画道路湊神前線道路改良工事に伴う井辺遺跡出土遺物等整理業務	和歌山市神前	2012.07.23～2013.03.25	—	和歌山県
17	都市計画道路松島本渡線(神前南)道路改良工事に伴う井辺遺跡及び神前遺跡第１次出土遺物等整理業務	和歌山市神前	2012.04.23～2013.03.31	—	和歌山県
18	和歌山橋本線道路改良工事に伴う神前遺跡第１次出土遺物等整理業務	和歌山市神前	2012.04.23～2013.03.21	—	和歌山県
19	県道御坊由良線(和田Ⅱ遺跡)出土遺物等整理業務	日高郡美浜町和田	2012.12.17～2013.03.20	—	和歌山県

文化財建造物の保存修理技術指導業務等

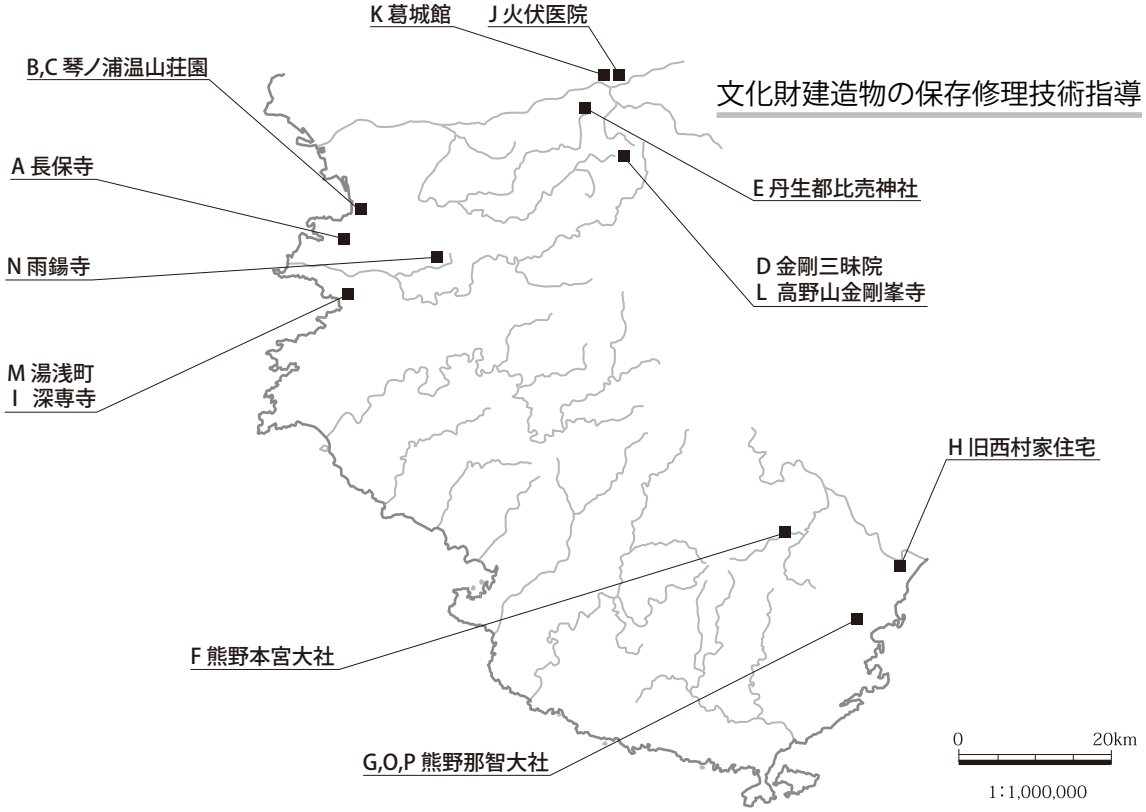
	受託業務の名称		所在地	実施期間	棟数	委託機関等
A	国宝	長保寺大門ほか２棟保存修理技術指導業務	海南市下津町上	2012.04.01～2012.12.31	2棟・1基	宗教法人　長保寺
B	重要文化財	琴ノ浦温山荘主屋ほか２棟耐震診断技術指導業務	海南市船尾	2012.06.02～2013.03.31	3棟	公益財団法人 琴ノ浦温山荘園
C	重要文化財	琴ノ浦温山荘主屋ほか２棟保存管理計画支援業務	海南市船尾	2012.04.01～2013.03.31	3棟	公益財団法人 琴ノ浦温山荘園
D	重要文化財	金剛三昧院客殿及び台所ほか１基保存修理技術指導業務	伊都郡高野町高野山	2012.04.10～2013.03.31	1棟・1基	財団法人 高野山文化財保存会
E	重要文化財	丹生都比売神社本殿保存修理技術指導業務	伊都郡かつらぎ町上天野	2013.01.01～2013.03.31	4棟	宗教法人 丹生都比売神社
F	国史跡	熊野本宮大社神門ほか４棟保存修理技術指導業務	田辺市本宮町本宮	2012.08.01～2013.03.31	5棟	宗教法人 熊野本宮大社
G	重要文化財	熊野那智大社第一殿ほか７棟保存修理技術指導業務	東牟婁郡那智勝浦町那智山	2012.04.10～2012.12.31	8棟	宗教法人 熊野那智大社
H	重要文化財	旧西村家住宅保存管理計画作成業務	新宮市伊佐田	2013.01.11～2013.03.31	1棟	新宮市
I	県指定文化財	深専寺庫裏及び玄関保存修理技術指導業務	有田郡湯浅町湯浅	2012.07.24～2013.03.31	1棟	宗教法人　深専寺
J	登録文化財	火伏医院主屋、病院棟保存修理技術指導業務	橋本市橋本	2012.04.11～2013.03.31	2棟	火伏医院　火伏總子
K	登録文化財	旧葛城館保存修理技術指導業務	橋本市高野口町名倉	2012.04.11～2013.03.31	1棟	大矢　武
L	国史跡	高野山金剛峯寺伽藍中門再建工事技術指導業務	伊都郡高野町高野山	2012.04.01～2013.03.31	1棟	宗教法人　金剛峯寺
M	伝統的建造物群保存地区	湯浅町湯浅伝統的建造物群保存地区保存修理技術指導業務	有田郡湯浅町湯浅	2012.05.16～2013.03.25	—	湯浅町
N	重要文化財	雨錫寺阿弥陀堂保存修理技術指導業務	有田郡有田川町杉野原	2012.12.04～2013.03.31	1棟	宗教法人　雨錫寺
O	国史跡	熊野三山史跡等・登録記念物・歴史の道保存整備事業に伴う技術指導業務	東牟婁郡那智勝浦町	2012.09.01～2013.03.31	3棟	宗教法人 熊野那智大社
P	国史跡	世界遺産緊急保全対策事業（那智大社東門修繕事業）に伴う技術指導業務	東牟婁郡那智勝浦町	2013.02.27～2013.03.31	1棟	宗教法人 熊野那智大社

平成24（2012）年度　受託業務所在地図

埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物整理



文化財建造物の保存修理技術指導



平井Ⅱ遺跡の発掘調査

遺跡の時代：古墳時代～近世
所　在　地：和歌山市平井
調査の原因：一般国道26号第二阪和国道建設
調 査 期 間：2012.06 ～ 2012.10
調査コード：12-01・437

はじめに

第二阪和国道の建設工事に伴い、周知の遺跡外で遺物の出土が確認されたため、和歌山県教育委員会により試掘・確認調査が実施された。調査の結果、工事範囲北側にある丘陵の裾部を中心とした範囲が新たに埋蔵文化財包蔵地として認定され、平井Ⅱ遺跡と呼称されることとなった。周辺には、調査地北東の丘陵上に築かれた大谷古墳を含む晒山古墳群や雨が谷古墳群及び鳴滝古墳群、扇状地に位置する楠見遺跡、平井Ⅱ遺跡同様に丘陵裾部にある平井遺跡などがある。

調査の成果

近世の土坑　円形の土坑で、全体で20基前後あり、調査区中央部に集中して掘削されている。規模は直径1.4 ～ 1.6m前後、深さは20 ～ 30㎝程度のものが多い。18世紀代の陶磁器類や瓦が出土している。

中世のピット　平面形はほぼ円形で、直径は30㎝前後のものが多い。瓦器椀の完形品1点と中世の須恵器捏ね鉢約1/2個体が出土するもの（53ピット）や、瓦器椀の完形品が２点出土するもの（59ピット）がある。

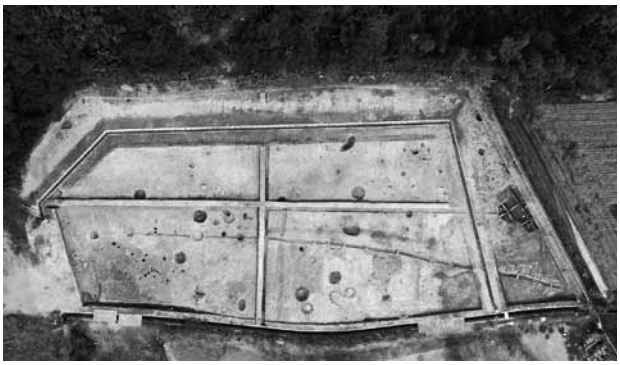
遺跡位置図　　437：平井Ⅱ遺跡

古墳時代の竪穴遺構　調査区の東端部で検出した。遺物は、古墳時代の土師器のほか、初期須恵器が多数出土している。器種には、器台・高杯・壷等があり、器台には、波状紋・組紐紋・斜線紋・竹管紋等が施され、壷の体部には平行叩きや格子叩きが認められる。

まとめ

今回の調査で検出された遺構で、確実に古墳時代の遺構と考えられるのは、竪穴遺構１基のみである。竪穴遺構は、主柱穴やカマドまたはそれに類似する施設が調査区内では検出されなかったことや、床面に凹凸があることなどから、住居である可能性は少ないと考えている。今回の調査では、包含層出土分も含め多数の初期須恵器が出土している。組紐紋や竹管紋等を施し、楠見遺跡出土の初期須恵器と共通する点も少なくない。古墳時代の注目すべき遺物に埴輪の出土がある。円筒埴輪及び形象埴輪があり、調査地周辺での古墳の存在を示唆する遺物である。

中世の遺構は、調査区のほぼ全域で検出している。瓦器椀が完形で出土している53ピット及び59ピットは地鎮に関連する遺構と考えているが、周辺で建物を復元することはできなかった。　　（井石　好裕）


調査区全景（南から）

竪穴遺構（南西から）

平井Ⅱ遺跡の第２次発掘調査

遺跡の時代：古墳時代～近世
所　在　地：和歌山市平井
調査の原因：一般国道26号第二阪和国道建設
調 査 期 間：2013.01 ～ 2013.02
調査コード：12-01・437-2

はじめに

一般国道26号第二阪和国道建設に伴い、平成24年６月から10月にかけて行った第1次調査に引続き、第２次発掘調査を実施した。第２次調査地は、第１次調査地（１区）の南西に位置し、調査前の現況は水田及び宅地である。

調査の成果

調査地は、調査前には水田であった北側部分（２区）と、宅地のあった南側部分（３区）とに２分できる。丘陵裾部に近い２区が一段高く、２区と３区の比高差は約1.3mである。

２区　２区の遺構面は２面である。第1遺構面検出遺構には、溝・土坑がある。溝はいずれも素掘りで、検出された箇所により、調査区の東と西及び北の３グループに分けることができる。東側の溝群は、幅20㎝前後、深さは５㎝以内のものが多く、50㎝前後の間隔で掘削されている。一方、西側の溝群は、幅20～30㎝と東方の溝群に比べやや広い。掘削の間隔は20～40㎝である。出土遺物は、中世の瓦器や土師器を主とし、初期須恵器を含む古墳時代の須恵器や埴輪片も散見できる。これらの溝はいずれも中世以降の水田耕作に伴うものと考えられる。第２遺構面検出遺構には、土坑・溝・ピットがある。土坑は調査区中央部から西側の範囲でのみ検出される。平面形は、円形及び楕円形を呈し、深さは、残りの良いもので20㎝前後、多くは５～10㎝である。出土遺物は、古墳時代の須恵器及び土師器である。須恵器には、乳状突起を付した甕或いは壷の破片が含まれる。

３区　調査前の現況が宅地（民家）であったことから、建物の建築及び撤去に伴う重機等による広い範囲での掘削・攪乱が顕著で、遺構が確認できたのは調査区北（東）側の約1/3の範囲に限られる。検出した遺構には、溝・土坑・ピットがある。

まとめ

２区の第１遺構面及び３区で検出できたのは、基本的には水田耕作に伴う遺構のみである。水田は、２区で確認された盛土の存在などから、複数の時期に区画の拡幅などの改変が行われていたようである。

出土遺物の時期は、弥生時代の一部のものを除き中世と古墳時代に帰属する。瓦器は、１区では、完形品も複数出土し、時期が12世紀前半代であるのに対し、２区出土の瓦器は、細片が多く時期が13世紀中葉以降であるなどの相違点がみられる。１区出土の初期須恵器は、器台や高杯が多く、組紐紋や竹管紋等で施紋された破片が多いのに対し、２区出土初期須恵器の多くは甕或いは壺の破片である。また、乳状突起を付した破片が２点出土しているが、乳状突起をもつ初期須恵器が出土するのは、楠見遺跡など限られた遺跡のみであり、注目すべき遺物と言える。　（井石　好裕）

２区第１遺構面検出遺構（南東から）

２区第２遺構面検出遺構（北西から）

根来寺遺跡の発掘調査

遺跡の時代：室町～江戸時代
所　在　地：岩出市根来
調査の原因：京奈和自動車道 (紀北西道路) 建設
調 査 期 間：2012.09 ～ 2013.03
調査コード：12-11・016-2

はじめに

新義真言宗の総本山として知られる根来寺は、平安時代の後期、興教大師覚鑁により根来の地に創建され、中世を通して勢力を誇った寺院として知られている。

今回の調査地は、この根来寺遺跡内の西北端に近い場所に位置しており、前年度実施した調査箇所の北側及び東側に当たる。調査区名は前年度との関係から今回の調査においては３～５区の名称を用いている。このうち洞尾川左岸の調査区を調査区３、さらに南側の丘陵中腹部に設定した調査区を調査区４及び調査区５と呼称した。

調査の成果

調査区３は、洞尾川の左岸部で、東側の丘陵裾部との間にあたる箇所である。大きくは２段の平坦面となっており、両者の比高差は約2.8mを測る。基本層序は、第１層が表土、第２層が耕作土、第３層が旧耕作土ないし盛土・崩落土で第４層が地山に大別できる。遺構が検出されたのは第４層上面である。ここでは中世の石組みの排水溝や中世および近世の水田区画を成す石垣が検出されている。このうち排水溝は、いずれも蓋石を伴う暗渠排水溝であり、水田の水はけを意図して設けられたもので、出土した遺物から中世、15世紀以降の可能性が高い。石垣については、４基確認したが、このうちのひとつは近世、他は中世のものである。

調査区４・５区は、風吹峠からつづく丘陵の中腹部に設けた調査区で、この付近は岩盤が緩斜面を示しており古道が想定された場所であった。しかし調査の結果、岩盤については自然地形のままで、人為的に削平し、平坦面をつくりだしているような痕跡は認められなかった。また、路面と思われる遺構についても確認できず、出土遺物は皆無の状況であった。

以上のことから現段階では、この平坦面については古道などではなく、新しい時期に山仕事などに利用されていた通路のようなものであったと判断している。

まとめ

今回の調査では、調査区３において前年度の調査と同様に中世にまで遡る可能性の高い水田の跡を確認することができた。このこと自体も意味ある成果であるが、それ以上に、子院の跡がまったく検出されなかったことにより大きな意味があると言える。つまり、中世、全盛期の根来寺においてもこの付近にまで子院は及んでいなかったことが判明したわけであり、中世根来寺の寺域を考える上で、貴重な成果を得たものと言える。一方、「古道」の検出には至らなかった。この付近には泉南地域へと通ずる道が想定でき、長く根来寺が交通の要衝であったことを言われながら具体的な「古道」については、その規模はもとよりルートも明らかになっていない。根来寺と泉南地域の結びつきを考える上で今後ともこの「古道」の考古学的解明に期待がもたれるところであり、精力的な調査が望まれよう。

(村田　弘)

調査地遠景（北から）

調査区３　石組暗渠排水溝１（南東から）

田ノ口遺跡の調査

遺跡の時代：弥生～古墳時代・平安時代
所　在　地：西牟婁郡白浜町十九渕
調査の原因：近畿自動車道紀勢線建設
調 査 期 間：2012.05 ～ 2012.11
調査コード：12-36・61

はじめに

田ノ口遺跡は富田川河口から東へ約2㎞の位置にある弥生～古墳時代、平安時代の遺跡である。富田川支流である高瀬川の東岸に広がる沖積地の一部と、標高40m程度の丘陵の西側斜面がその範囲に含まれる。

調査区は1 ～ 3区の3区画に分割し、平野部に1区、丘陵裾に2区、丘陵斜面に3区を設定した。

調査面積は合計4,117㎡である。

調査の成果

1区

調査地の現況は荒蕪地であったが、もとは水田であったところで昭和40年代に圃場整備が行われている。調査区東半は、現代において地山まで掘削され、部分的に岩盤が露出していた。

1溝は調査区内を南北に延びる溝状の遺構で、須恵器等の遺物が出土しており平安時代頃の遺構であると考えられる。またこの1溝の西側上端付近からは、権状石製品（けんじょうせきせいひん）が出土した。

この権状石製品は高さ8.4㎝、重さ756ｇで、上部にひもを通したとみられる紐が作り出されており、棹秤のおもりとして使用された可能性が高い。

調査地位置図　S=1:38,000

溝状遺構の東側には直径3m程度の浅い土坑があり、ここから土師器、灰釉陶器、黒色土器等がまとまって出土した。出土量は合計100固体以上を数え、数枚を重ねて、または整然と並べられた状態で出土している個体も確認された。この土坑の西側には多量の炭化物が薄く堆積し、一部は溝状遺構に流れ込んでいた。

遺物の出土状況と焚火痕跡を伴うことから、祭祀的な性格の遺構であると推定される。

2区

ほとんどの遺構が近世以降のものであり、当該地はこの頃平坦地に造成され、宅地として利用され始めたとみられる。また34土坑では平安時代から中世と考えられる土師器の小片が出土していることから、もとは丘陵裾部（2区）から平野部（1区）へ下るなだらかな斜面で、平安時代頃までの遺構が展開していた可能性が高い。

3区

調査区を設定した斜面は以前畑地として利用されていた場所で、一部が開墾によって平坦地となっている。

27竪穴建物はほぼ正方形に近い隅丸の平面形をした遺構で、中心付近に直径20cm程度の浅い柱穴がある。また底面付近の埋土中から少量の炭化物を検出した。遺物は弥生土器片と台石が出土している。

写真 1　66 土坑

66土坑（写真1）は平安時代頃の遺構と推定される直径60cm程度の円形の土坑で、深さは30cm程である。上端付近は熱を受けて赤く変色しており、埋土中には多量の炭化物を含まれていた。

58土坑からは小片であるが二彩の可能性がある施釉陶器片が出土した。　(寺西　朗平)

大古Ⅱ遺跡の発掘調査

遺跡の時代：弥生時代～古代
所　在　地：西牟婁郡白浜町大古
調査の原因：近畿自動車道紀勢線建設
調 査 期 間：2012.05 ～ 2012.10
調査コード：12-40・03

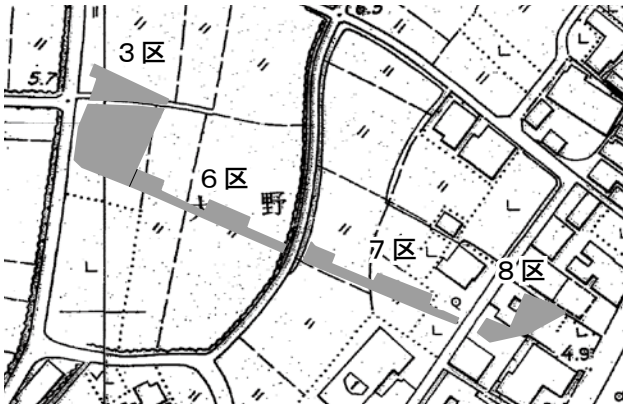
はじめに

大古Ⅱ遺跡は、西牟婁郡白浜町大古に所在する弥生時代から古代の遺跡である。和歌山県南部を流れる日置川の下流域右岸に位置し、遺跡の北側丘陵には、最古の紀年名をもつ備前焼の甕が出土した長寿寺がある。当遺跡は、その丘陵から南北に細長く延びる自然堤防（微高地）上に位置している。

今回の調査は、近畿自動車道紀勢線建設工事に伴う発掘調査であり、2011年度の未調査範囲である面積1,151㎡を対象に実施した。調査地を東西４区に分けて調査を行った。

調査位置図（S=1：25,000）

調査区遠景（南西から）



調査区設定図（S=1：2,500）

調査区３・６全景　第３遺構面（南から）

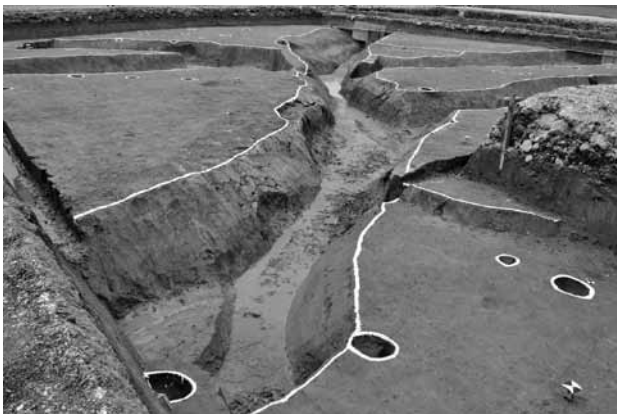
調査の成果

第１遺構面

調査区３では北西から南東方向に蛇行しながら延びる溝の他、柵状遺構１列、多数の土坑、ピットを検出した。溝の規模は幅2.1 ～ 3.9m、深さ約1.0mと比較的大規模で、長さ約30mを確認した。遺物は極めて少量であるが、堆積土の上層から少量の須恵器片が出土しており、古代に帰属すると考えられる。調査区の北端では南北方向に柱穴が並ぶ柵状遺構を検出した。柱穴は７基が遺存しており、規模は径約0.3m、深さ0.2 ～ 0.8mである。約３m分を検出したが、北側は調査区外に延長する可能性がある。

調査区６では調査区３で検出した溝の延長と数基のピット、土坑を検出した。遺構密度は希薄で、西側でのみ検出されている。

調査区７では多数の土坑、ピット、中央で溝状遺構２条を検出した。東側に位置する溝状遺構の規模は幅約0.6m、深さ0.3m、北東から南西に延びる約4.6mを検出した。遺物は土師器の皿が数点出土しており、古代に帰属すると考えられる。


溝　第１遺構面（調査区３・６）（南東から）

第２遺構面

調査区３では溝３条が検出されると考えられる。いずれも南北方向の溝で調査区外に延長する。規模は幅0.9 ～ 3.8m、深さ約0.45 ～ 1.0mである。遺物は弥生土器が僅かに出土している。

調査区６では西端で確認された階段状遺構が、この第２遺物面の時期（古代以前）に帰属すると考えられる。規模は南北約5.5m、東西約3.3mで、形状は方形を呈す。東から西に約0.2mずつ下がる３段分を検出した。

調査区７では中央北端で竪穴遺構を検出した。遺存規模は東西約５m、南北約３mである。一部で周溝状の遺構を検出し、貼り床状及び炭化物を含む堆積土を確認している。調査区中央東で検出した２基の土坑からは弥生時代中期の土器が多量に出土している。同時に炭化した堅果類と思われる植物遺体が出土している。

第３遺構面

調査区３ではL字状の柱列１列とそれに伴う溝１条を検出した。柱列は東端で検出されたため明確ではないが、掘立柱建物を構成するものと推測される。南北４間と南西隅の東西１間分の柱穴６基を検出した。柱間は2.2 ～ 2.9mで、柱穴の規模は直径0.24 ～ 0.3m、深さ0.3 ～ 0.4mである。柱列の南側で、検出長約1.8m、幅0.27mの平行する溝を検出している。

調査区６では西側と中央で多数のピットを検出した。遺物は弥生土器が少量出土している。

調査区７では西側から中央で土坑１基と多数のピットを検出した。遺物は弥生土器が少量出土している。

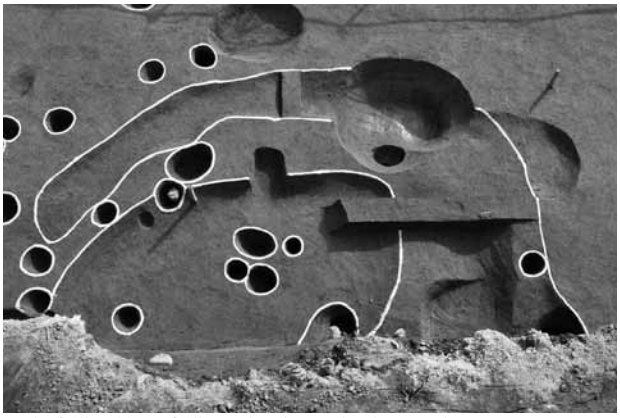
まとめ

調査地は中央の調査区７が自然堤防の稜線付近にあたり、東端は日置川に向かって下る地形となる。西側の調査区３・６は後背地でやや低くなる。遺構が検出されなかった調査区８は、日置川に向かって下った低地に位置し、日置川の氾濫原であったと考えられる。

昨年度調査も踏まえ、微高地上では集落を構成する遺構や遺物が多く確認され、後背地では大規模な溝が検出されている。この地域は古くから日置川の氾濫により何度も水害を受けていると考えられ、生活の拠点は限られた微高地上であると推測される。南北方向に形成された自然堤防上を中心に、集落を構成する遺構が展開していると考えられる。　（森原　聖）

階段状遺構　第２遺構面（調査区６）（南東から）

土坑　第２遺構面（調査区７）（西から）


竪穴遺構　第２遺構面（調査区７）（北から）

田屋遺跡の発掘調査及び整理業務

遺跡の時代：弥生時代・平安～鎌倉時代
所　在　地：和歌山市田屋
調査の原因：大和紀伊平野農業水利事業
調査：2012.11/整理：2012.12 ～ 2013.01
調査コード：12-01・093

はじめに

田屋遺跡は、和歌山市の中央を流れる紀ノ川の河口から約９km遡った北岸の標高約6.0mを測る沖積地に立地している。和歌山平野には灌漑用水に利用された旧河道が無数に分布しており、調査地の南に接して古くから知られる六箇井用水が流れている。

今回の調査は大和紀伊平野農業水利事業に伴い、面積333㎡を対象に実施した。調査終了後、出土遺物の整理作業を行い、発掘調査報告書を刊行した。

調査の成果

今回の発掘調査では北東側を除き遺構検出を２面行った。どちらの遺構面でも平安時代後半から鎌倉時代の遺構が検出され、調査区中央の一部において弥生時代後期の遺構を検出した。

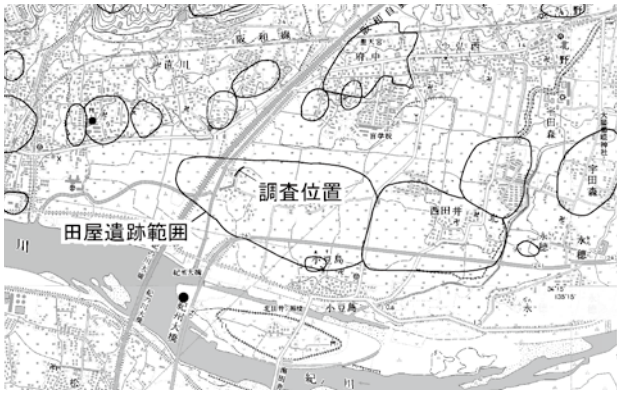
上面の第１遺構面では溝１条、柱列１列の他、多数の遺構を検出した。調査区中央南で検出した溝は幅約2.3m、深さ0.8mである。堆積土上層からは多くの遺物や炭化物が出土している。周辺の遺構からも炭化物や２次焼成を受けた遺物が出土しており、火災の可能性を窺わせる。遺物は瓦器や土師器が出土している。

第２遺構面では溝６条、井戸状遺構２基、自然流路１条の他、多数の遺構を検出した。調査区中央で検出した２条の溝は幅0.3 ～ 0.5mと小規模で、区画などに利用された可能性が考えられる。調査区の南側では井戸状遺構を検出した。井戸状遺構が用水路に隣接して検出されたことから、当該期に六箇井用水が現在の場所に位置していたとは考えにくい。江戸時代には測量し、延長された記録が残っているため、現在に近い流れをもっていたと推測される。調査区の中央では南北方向に蛇行する自然流路を検出した。深さは１m程度で幅は1.4m以上である。延長約11.6mを検出し、遺物は弥生時代後期の土器や石製品が出土している。

まとめ

調査地の遺構検出面は、北東端が最も標高は高いが傾斜地にあたるため遺構は希薄であった。中央は比較的広範囲に平坦面を形成しており、遺構は多く検出されている。

これまでの当遺跡範囲の発掘調査では、縄文時代晩期をはじめとする幅広い時代の遺構が検出され、現在の六箇井用水南側一帯は紀ノ川の氾濫原であったと判明している。その中で、中世の遺構はほとんど確認されておらず、今回の調査で平安時代から鎌倉時代の遺構を検出したことにより、当該期の一辺を確認することが出来た。また、弥生時代の遺構は自然流路のみで、その他の遺構が遺存しているなら北西側を中心とすると考えられる。和歌山平野を潤してきた旧河道やそれに先立つ自然流路などの水の流れは、集落を形成する上で重要な要素であり、この地に多くの遺構が展開している可能性を推測させる。　（森原　聖）



遺跡位置図（S=1：50,000）

溝（第１遺構面）遺物出土状況（北から）

六十谷遺跡(第2次・第3次)の発掘調査

遺跡の時代：弥生時代・古墳時代・中世・近世
所　在　地：和歌山市六十谷
調査の原因：都市計画道路西脇山口線（園部・六十谷）
　　道路改良事業
調 査 期 間：2012.03 ～ 2012.06（第2次）
　　2012.07 ～ 2012.09（第3次）
調査コード：12-01・84（第2次）12-01・84-2（第3次）

はじめに

六十谷遺跡は紀ノ川北岸の和歌山市六十谷に所在する。本調査地は和歌山県により都市計画道路西脇山口線（園部・六十谷）道路改良工事が計画され、2011年度に第1次調査を行っている。今回は第1次調査地を中央に、東側を第2次、西側を第3次で調査を行った。調査面積は、第2次調査区で408㎡、第3次調査区で104㎡である。調査地は遺跡範囲の中央南端に位置する。

調査の成果

【第2次】調査では、弥生時代・古墳時代・中世の遺構を検出した。弥生時代の遺構は土坑1基を検出したが、その他には明瞭な遺構は見られない。古墳時代の遺構には、北から南東に向かい流れる溝がある。また中央に炉をもつ方形の竪穴遺構も検出した。中世の遺構には、調査区東端で南北方向の掘状の遺構を検出した。肩幅11m、底面幅３mを測り、深さは2.2mで、形状は台形を呈している。遺物は12世紀～ 13世紀の瓦器等が見られ、その他には石包丁や古銭（熈寧元寶）が出土している。その他の遺構は、複数のピットや柱穴も多く検出しており、東西2間×南北2間以上の掘立柱建物も確認したが、現段階では時期の特定には至っていない。その他の遺物は石鏃が2点出土している。

六十谷遺跡周辺には、所在が特定されていないものの、文献資料等から中世の城跡が存在すると考えられている。今回検出した掘状遺構について、全容は不明であるが人為的に掘削されており、規模等から、周辺に所在するとされる六十谷城跡の堀の可能性が考えられる。

【第3次】調査地は撹乱が著しいものの、弥生時代・中世の遺構を検出した。弥生時代の遺構は、土坑を1基検出しており弥生時代中期の高杯等が出土している。また調査区南側には、瓦器などを含む中世の整地土が堆積しており、旧地形の落ち込みであると考えられる。その他の遺物としては、サヌカイト片が出土している。

まとめ

六十谷遺跡の調査では、2011年度に実施した第1次調査において弥生時代後期、古墳時代中期の遺構が検出された。中世に土地利用のため整地されたと推測される。今回の第２次・第3次の調査では、弥生時代・古墳時代・中世の遺構を検出し、第１次調査で検出した旧地形の落ち込みが西側へ延長することが判明した。中世に帰属する掘状遺構は、文献資料に見られる六十谷城跡の存在を推測させる有力な資料となった。また、第1次の調査結果も踏まえ、調査地の北側には六十谷遺跡の居住域が広がると推測される成果を得ることができた。　（津村　かおり）

調査位置図（S=1/50,000）

土坑　土器出土状況－第３次－（南西から）

立野遺跡の発掘調査

遺跡の時代：弥生～古墳時代・古代
所　在　地：西牟婁郡すさみ町周参見
調査の原因：近畿自動車道紀勢線建設
　　すさみ西インターチェンジ（仮称）の建設
調 査 期 間：2012.11 ～ 2013.02
調査コード：12-41・02

はじめに

立野遺跡は、周参見湾から東へ2.5㎞程に位置する、河川の浸食と堆積によって形成された平野に所在する遺跡で、現在遺跡の北方500mを西流する周参見川はかつて当遺跡付近を経て周参見湾に注いでいたと推定されている。

今回の調査は当該地におけるインターチェンジの建設計画により実施したもので調査面積は1,249㎡である。

調査の成果

今回の調査では、1 ～ 6区の調査区において、弥生時代前期、弥生時代中期から後期、古墳時代及び古代といった各時代の遺構や自然流路を検出した。

各時代の自然流路は埋土に多量の木質遺骸を含み、土器や石器のほか木製品等の遺物も出土した。

弥生時代前期の自然流路は6区で検出しており、平成22年度に実施した調査において検出された自然流路の下流にあたるものと推定される。前回の調査と同様に、東岸に立ち並んでいたとみられる樹木の根の一部が検出され、流路内からも長さ4m以上、幹回り90㎝程の樹木の幹が出土している。遺物としては突帯文土器、頁岩製の石器が出土した。（写真1）

弥生時代中期から後期の自然流路は3区と4区及び6区で検出しているが、流路全体を覆うように木質遺骸の堆積がみられ、一時的にも滞留のあった様子が窺える。

古代の自然流路からは杭や木製品の一部等が出土した。写真2は、箱形の木製品の一部と考えられる板状の木片である。この他、1区では古墳時代の溝や古代の水田に伴う畦畔を検出している。　（寺西　朗平）

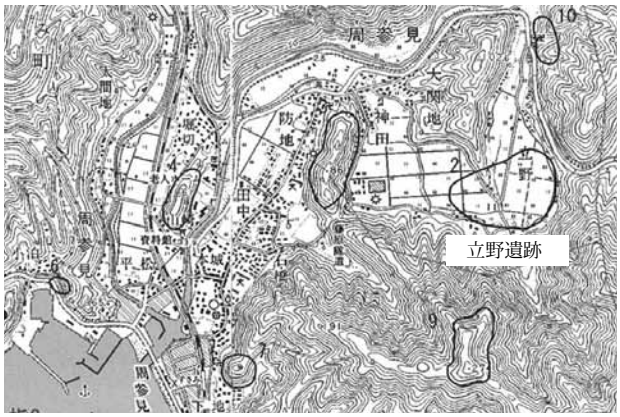


図１　調査地位置図　S=1/38,000

図２　調査区位置図　S=1/25,000

写真１　自然流路（6 区　弥生時代前期）（北から）

写真２　遺物出土状況（3 区）木製品の一部（東から）

岩崎大泓・岩崎大泓Ⅱ遺跡の発掘調査

遺跡の時代：弥生時代・中世
所　在　地：西牟婁郡上富田町岩崎
調査の原因：近畿自動車道紀勢線建設
調 査 期 間：2012.10 ～ 2013.02
調査コード：12-39・44（岩崎大泓遺跡）
　　12-39・63（岩崎大泓Ⅱ遺跡）

はじめに

近畿自動車道紀勢線工事に伴い和歌山県教育委員会の試掘・確認調査が実施された。確認調査の結果、周知の遺跡である岩崎大泓遺跡とその北側の自然流路と谷状地形で分断された試掘調査で遺構確認した範囲を岩崎大泓Ⅱ遺跡と呼称し、新発見の遺跡として発掘調査を実施した。周辺の遺跡には、富田川を挟んで対峙する丘陵上には山城跡が点在している。これらは豊臣秀吉の紀州制圧時にかかる時期のもので、この地域を支配していた山本氏の竜松山城跡や国陣山城跡、蛇喰城跡が右岸に、釣瓶山城跡が左岸に所在している。また、秀吉方の山城としては塗屋城跡が本遺跡の0.5㎞北に所在し、最近、調査され堀切が確認されたことでも知られている。

調査の成果

（岩崎大泓遺跡）調査面積 1,315㎡

調査地の現況は水田で、ほぼ中央を北から南に直角に屈曲する現有水路が流れている。この水路の北東側を１区、南西側を２区と呼称して調査を行った。現況の水田下は４枚以上の近世水田が確認でき、この下層は中世包含層となり、この包含層除去後遺構検出面となる。１区で検出した遺構は、数基の土坑状遺構のみで、これらの遺構の一部からは微量の土師器皿細片と瓦器細片が出土した。なお包含層からは火縄銃の玉が１点出土した。２区では溝状遺構を３条、水田と考えられる方形の区画を２基と畦畔状の高まりを検出した。溝はこれらの水田状の遺構に伴う用水路と考えられる。遺物は水田層からは瓦器片、溝状遺構からは瓦器片や黒色土器片が出土した。

岩崎大泓遺跡　航空写真（南上から）

（岩崎大泓Ⅱ遺跡）調査面積 978㎡

調査地の現況は宅地跡及び水田である。南側の丘陵裾部を１区、北側の丘陵に挟まれた谷間を２区とし調査を行った。１区では現地盤及び近世包含層を除去すると、丘陵裾部から低地に向かって落込む堆積層を確認した。堆積層の下層では丘陵からの落ち際で土器を多量に含む層を確認した。この層から出土する土器は弥生時代終末期のもので、高杯の破片が目立って多い。

２区は、現代整地層及び水田層を除去後、２層の中世包含層を確認し、包含層除去後２面の中世遺構面を確認した。出土遺物から下面は13世紀を、上面は15世紀を中心とする遺構を検出した。上面では直角に掘られた溝状遺構を検出し、溝状遺構の中に柱穴群を検出した。溝で区画された屋敷地と考えられる。

まとめ

今回の調査において岩崎大泓遺跡、岩崎大泓Ⅱ遺跡の両遺跡で検出した遺構は、概ね中世の時期のものであった。谷状地形の湿地状低地を整地して人が住みつき、水田耕作を行ったことが判明したと言える。また、この両遺跡の中世遺構面の下層を数ヶ所のトレンチを設け確認したところ、弥生時代終末期の土器が出土した。この状況から、周辺の小高い箇所には、この時期の集落の存在が推測できる。　（佐伯　和也）

岩崎大泓Ⅱ遺跡　航空写真（西上から）

和田遺跡の発掘調査

遺跡の時代：弥生～古墳時代・古代～中世
所　在　地：和歌山市和田
調査の原因：秋月海南線道路改良工事
調 査 期 間：2012.10 ～ 2013.02
調査コード：12-01・301

はじめに

和田遺跡は和歌山市の南東部に位置する。遺跡の北側には、和歌山市山東地区から西流する和田川があり、遺跡周辺はこの和田川により形成された低湿地であったとされる。遺跡範囲は和田川を北端とし、南北約500m、東西約400mである。今回の調査は、秋月海南線道路改良工事に伴い1,557㎡の発掘調査を行った。周辺一帯は河南条理が良好に残り、現状は水田が広がっている。

調査の成果

弥生時代の遺構では、直径約1.8mを測る素彫りの井戸がある。この遺構からは弥生時代前期と考えられる貼り付け突帯をもつ壺の口縁から肩部にかけてと底部が出土している。また、調査区西側から南側にかけて検出した落ち込み状遺構がある。調査区中央部分より西側にかけて落ち込んでいる。肩部には多量の土器が集中しており、弥生時代中期の壺や古墳時代の高杯、甕、木製品、小型の石斧や砥石など多く遺物が出土している。その他、土坑やピットを検出しており、弥生土器の高杯やミニュチア土器も出土している。

古墳時代の遺構では、土坑や溝状遺構を検出した。調査区北側の中央付近で検出した土坑からは、古墳時代中期と考えられる壺や高杯が出土している。調査区南端で検出した溝状遺構は、北端部分のみの検出であり全容は明らかではない。この溝状遺構は、弥生時代に帰属する落ち込み状遺構の埋没後に掘削されたものと考えられる。出土遺物では、古墳時代中期と考えられる製塩土器や須恵器の杯身、有孔円盤、滑石製の臼玉なども出土している。

古代～中世にかけての遺構では、木枠の井戸を検出した。直径0.8mの円形を呈し、四隅に直径10㎝ほどの杭をうち板材を井戸枠としている。上層の埋土を取り除くと、30㎝大の砂岩・片岩が重なり堆積していた。それらを取り除くと土師器の皿に白石を入れた状態で埋設されており、井戸の廃絶に伴う祭祀が行われたものと考えられる。

まとめ

文献資料には、調査地周辺は和田川の塩入常荒田と記され、作物の生産や集落の形成は困難な地域と考えられていたが、調査の結果、井戸・土坑・溝状遺構などの遺構を検出した。調査地の旧地形は、北東側から東側にかけて微高地が広がることが判明し、この微高地部分に弥生時代～中世にかけての遺構が見られる。遺構の検出状況から推測すると、調査地周辺の東側から南側に居住域が展開すると考えられる。

また今回の調査で中世以降の明瞭な遺構は、井戸以外には検出されておらず、このことから、水田として土地利用が行われ、現代に至ったと推測される。

（津村　かおり）

遺跡位置図（S=1/50,000）

落ち込み状遺構（205）　土器出土状況（南から）

根来寺遺跡の発掘調査２

遺跡の時代：室町～江戸時代
所　在　地：岩出市根来地内
調査の原因：防火施設設置
調 査 期 間：2012.07 ～ 2012.09
調査コード：12－11・016

今回の調査は、防災施設設置に伴うものであり、大塔・太子堂・大伝法院といった根来寺の主要堂塔が建てられている伽藍中枢部を対象としたもので、合計34箇所のグリッドを開け、調査に当たった。

その結果、中世に遡る可能性が高い、南面する高さ70cmほどの石垣や鋳造に関係すると思われる土坑及び遺構面の一部が焼けて赤く変色していることを確認した。

そのほかこの付近の旧地形は、北西から南東側に向かってかなりの勾配があったものと思われるが、16世紀中頃から後半にかけての大塔建設時に伽藍域の整備の一環として大規模な整地がなされた可能性が高いことが判明した。また、今回の調査では、山内の発掘調査で普遍的に検出される1585年の天正の兵火の痕跡を示す焼土がまったく確認できなかった。

さらに伽藍域においては、現存する建物に先行して子院が建てられていた形跡も無く、兵火後においてもそのことは認められない状況であった。

そういう意味においてもこの地は特殊な場所、紛れも無く根来寺における「聖域」でありつづけた場所であったと考えられよう。

今回の発掘調査でこのことをあらためて確認できたことの意義は大きいと言えよう。　　(村田　弘)

４グリットで検出された石垣

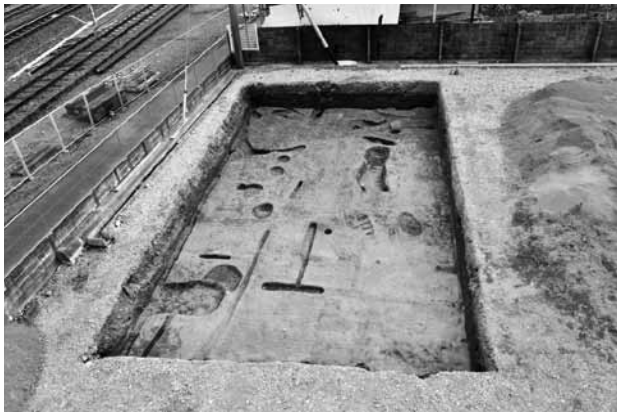
片山遺跡の発掘調査及び整理業務

遺跡の時代：弥生～古墳時代
所　在　地：日高郡みなべ町芝
調査の原因：クライミングウォール建設
作 業 期 間　：2012.11 ～ 2013.03
調査コード：12-33･032

片山遺跡は、南部川河口左岸に形成された海岸砂丘上に位置する。砂丘稜線付近は、弥生時代から古墳時代にかけて墓地として利用され、高見遺跡･片町遺跡･南部高校遺跡・片山遺跡が北西から南東に繋がっている。

2015年に開催される「紀の国わかやま国体」の山岳競技がみなべ町で行われるのに伴い、県立南部高等学校の敷地内にクライミングウォールが建設されることになり、建設に先立って発掘調査をおこなった。調査面積は126㎡で、平成24年11月から12月まで現地調査をおこない、報告書作成に伴う整理業務は平成25年３月に実施し、報告書を刊行した。

調査では土坑が検出され、遺物では遺構出土以外のものを含め突帯文土器・弥生土器・土師器・近世陶磁器などが出土した。土坑は規模が0.5 ～１ｍと小規模なもので、弥生土器や土師器の破片が出土しているものの、埋土から中世以降に帰属する可能性がある。ただ、出土した弥生土器・突帯文土器については、原位置を離れているものの、既往の調査事例からも土壙墓の供献土器であった可能性が高い。　　（川崎　雅史）



調査区全景

立野遺跡の出土遺物整理業務

遺跡の時代：弥生～古墳時代
所　在　地：西牟婁郡すさみ町周参見
調査の原因：近畿自動車道紀勢線の建設
作 業 期 間：2012.06 ～ 2013.03
調査コード：10-41･002

はじめに

平成22年度に実施した立野遺跡の発掘調査で、弥生時代前期の自然流路・遺構302から土器・石器・木製品が多量に出土した。平成24年度は、調査で出土した土器類コンテナ60箱、石器類コンテナ44箱（約2500点）、木器・木製品約400点、金属製品３点ほか木材サンプルを対象に報告書作成に伴う出土遺物整理業務をおこなった。また、重要度が高く、処理の緊急性を要する鉄斧１点と木製品184点の保存処理を高級アルコール含浸法で実施している。

遺構302・３層出土遺物

土器は県下最古段階の弥生土器と縄文土器の系譜にある突帯文土器で、弥生土器と突帯文土器の比率は１：９で、同時期の遺跡に比して圧倒的に突帯文土器が多い。弥生土器の器種は壺に限られ、甕・鉢・高杯は出土しない。突帯文土器は和歌山県南部地域に多い瀬戸タイプが主を占める。

石器石材は地元産の頁岩を多用し、組成も石鏃がわずかである。伐採斧がなく石器製作に用いたと考えられる加工斧や削器・楔形石器などが多量に出土し、それらの石器も製作していたことが窺える。

木製品には、工具６点（斧膝柄・斧直柄・楔状木製品）、農具53点（平鍬・広鍬・泥除け・刈払具・竪杵）、狩猟具９点（弓・矢）、食事具７点（匙・竪杓子）、容器46点（舟形・鉢状・浅鉢状・皿状）、建築部材22点（梯子・柱材・垂木ほか）、その他６点（琴状木製品・俎状木製品ほか）、木材23点（丸太材・半裁材・割材・板材）がある。これらには、樹種・木取り・器種の上で他の遺跡にみられない特徴が確認され、平鍬（曲柄狭鍬）にイスノキ製の板目取り、各種容器にクスノキの横木取りの材を使用した製作工程の分かる資料があり、直柄広鍬にも板目取りの製品・未成品がみられる。

まとめ

土器・石器・木製品の内容は、縄文時代から弥生時代に移行する過渡期を示すものであるとともに、和歌山県南部地域と言う地域性を顕すものでもある。当地に於いて、どのように弥生文化を受け入れたかを示す好資料であるとともに、農具がどのように変化していったか、当該期の木工を考える上では重要な発見であると言える。　（川崎　雅史）

弥生土器・壺

曲柄平鍬の製作工程

木製品加工用の斧

井辺遺跡及び神前遺跡の出土遺物整理

遺跡の時代：弥生時代、古墳時代、鎌倉時代
所　在　地：和歌山市井辺・神前
調査の原因：都市計画道路松島本渡線（神前南）道路改良工事
整 理 期 間：2012.05.01 ～ 2013.03.31
対象コード：10-01・308、11-01・308-1、11-01・307-1

当業務は、平成22年度・同23年度に実施した井辺遺跡及び神前遺跡の発掘調査業務で出土した遺物及び現地調査記録等の整理作業である。調査面積は、合計4,590㎡である。

出土遺物の内、土器・石器類は、通常の遺物収納コンテナ（28ℓ）にして499箱である。その他、木製品385点・金属製品6点である。出土遺物は、応急整理済みの物を省いて洗浄作業・遺物の分別作業・遺物への調査コードと出土遺物登録番号の注記作業・遺物破片点数の台帳登録集計・接合作業を行った。

基礎的な作業を経た主要遺物を対象に、遺物充填材による補強、遺物実測・実測遺物台帳登録・遺物実測図仮レイアウト、保存処理前木製品の写真撮影、集計登録データ等入力を行った。

現地調査の遺構図面の整理は、台帳登録・報告書用図面の作図を行い、調査報告書に掲載する図面原稿を抽出した。抽出した遺構図面の一部について、トレース作業を行った。また、調査報告書に掲載する「遺構規模一覧」を作成し、データのＰＣ入力作業を行った。

現地調査で撮影記録した遺構写真の整理は全写真を対象に、アルバム収納・登録番号・写真撮影内容の記載作業を行った。

井辺遺跡出土の竪穴建物柱材の実測作業

出土遺物の登録に伴う遺物破片点数の数量化は、大凡の時代と主要となる土器類・その他の遺物に分けて作業を進めた。土器の種類・器種は、矛盾のない程度に簡素化している。また、遺物量の多い主要遺構については、取り上げ区画別（４ｍ単位）・層序別遺物分布の破片数の計測を行った。

木製品及び金属製品は、腐朽を防止し、保存・活用を容易な状態にするために保存処理を専門業者に委託して行った。木製品115点はＰＥＧ含浸法及び真空凍結乾燥法による保存処理を、金属製品4点はアクリル樹脂減圧含浸による保存処理を行った。なお、保存処理作業に前後して、木製品は保存処理対象遺物の樹種同定を、金属製品はＸ線写真撮影及び成分分析を行った。

（土井　孝之）

遺物の洗浄作業

遺物充填材による弥生土器の補強作業

神前遺跡の第１次出土遺物整理

遺跡の時代：弥生時代～近世
所　在　地：和歌山市神前
調査の原因：和歌山橋本線道路改良工事
調 査 期 間：2012.04 ～ 2013.03
調査コード：09・10・11-01・307

はじめに

平成21 ～ 23年度に実施した発掘調査で出土した出土遺物339箱及び現地調査記録等の整理作業を実施した。作業は当センターの和歌山市岩橋（いわせ）倉庫及び和歌山市新在家分室で行い、事業期間は平成24年４月24日～平成25年３月21日である。事業は２箇年に分かれ、今年度は第１次出土遺物等整理業務として、基礎的な出土遺物整理を行った。年度初めには木製品の洗浄・実測を行い、その後、土器・石器の洗浄・注記・登録・接合・補強・実測及び遺構のトレース作業を実施した。また、整理作業と併行して青銅製品の保存処理を委託して実施した。

各作業は調査区（１～８区）ごとに、遺構・出土遺物の状況を把握しながら進めた。神前（こうざき）遺跡の遺構検出面は標高約１～２ｍと低く、多数の流路が調査区内を通過する。溝からは弥生時代前期新段階～中期前葉、庄内期、古墳時代中期、平安時代後期、江戸時代の遺物等が出土した。調査区は南北に長く、北から順に１・３・２・４・５区の遺構トレースと土器の接合・実測等を行っている。

整理作業の成果

１区では、弥生時代の溝の底よりも、古墳時代の溝の底が若干高い傾向があり、１本の溝のようにみえても、上層は古墳時代の溝で下層は弥生時代の溝と、峻別できる遺構が複数確認された。

３区では、調査区東の溝で弥生土器片が出土し、調査区中央付近の溝で古墳時代の土師器片が微量出土し、調査区北西部の溝で平安時代の遺物が圧倒的多数を占めて出土している。溝の位置は年代を追って北西部の標高の高い地点に向かっており、低地から微高地への耕地の拡大に伴い、用水の位置が高い場所へ移動しているものと推定される。調査区北西には備前焼大甕片が広範囲に散乱しており、江戸時代には調査区全域が屋敷地となっているので、中世から近世への過渡期に整地された可能性が考えられる。遺構・遺物の変遷が分かりやすい調査区なので、弥生土器から中近世の陶磁器・瓦類まで順を追って実測した。

写真１　備前焼大甕の接合作業

写真２　５区 5040 出土　弥生土器壺・甕

２・４・５区の溝では多量の土器が溜っていたようで、弥生時代と古墳時代の遺物が混在する溝が多い。また、５区の溝群の下層に堆積する遺構5040の埋土から、多量の弥生時代前期新段階を中心とする土器が出土している。写真２右の紀伊型甕は口縁部のナデ調整と体部のヘラケズリの間が若干突帯状に突出する少し古い段階のものである。写真２左の広口壺は口縁端部の４分の１に刻み目がまわる。頸部のヘラ描沈線は、ヘラを束ねて沈線をひくものもあり、櫛描紋への過渡期の様相の一端がうかがえる。

神前遺跡の出土遺物整理は２年度に渡り実施され、和歌山平野の農耕の始まりとその後の展開を考える好資料となることが期待される。　（丹野　拓）

井辺遺跡の出土遺物整理

遺跡の時代：弥生時代終末期～古墳時代
所　在　地：和歌山市神前
調査の原因：都市計画道路湊神前線道路改良工事
作 業 期 間：2012.1 ～ 2012.3
調査コード：11-01・308-2

平成23年度に発掘調査を行った井辺遺跡から出土したコンテナ12箱分の遺物整理を行った。調査と並行して行った応急整理作業により、遺物は洗浄済みである。発掘調査では、弥生時代終末期から古墳時代の竪穴建物や掘立柱建物など多くの遺構が検出されている。遺物は、弥生土器や土師器の甕・壺・高杯の他、青磁など中世の遺物も少量出土している。また、青銅製の鏃も出土している。

出土遺物の整理作業では、数量の集計、注記、接合を行った。次に、報告書に掲載すべき遺物について補強・復元作業の後、実測、トレースを行い報告書に掲載した。遺構の実測図面の整理作業では、報告書用図面の作成、トレースを行った。写真整理では、通し番号を付して遺構名や撮影方向などをアルバムに記入した。各整理作業での記録は台帳にまとめている。

整理作業を行った出土遺物は弥生時代終末期から古墳時代前期の遺物が大半を占めていた。井辺遺跡ではこれまでの調査を踏まえ広い範囲での集落構造の復元が試みられている。その結果、遺跡範囲内には少なくとも３箇所の居住域の存在が想定されている。より正確な集落構造を考える上で、今回の調査成果は重要な資料となるだろう。（森原　聖）

整理作業風景

和田Ⅱ遺跡の出土遺物整理

遺跡の時代：古墳時代～中世
所　在　地：日高郡美浜町和田
調査の原因：県道御坊由良線道路改良事業
作 業 期 間：2013.1 ～ 2013.3
調査コード：11-25・009

平成23年度の発掘調査によって出土した遺物等の整理作業を行った。和田Ⅱ遺跡は和歌山県の中央を流れる日高川の河口域に形成された海岸砂丘上に立地している。面積609㎡を対象とした調査では、主に古代末から中世の土坑、ピット、流路を検出している。

出土遺物の整理作業は、洗浄済みであった遺物の数量集計、登録、注記、接合・補強作業を行った。その中から報告書掲載遺物を抽出し、復元、実測、トレース作業を行った。遺構の実測図面の整理作業は、報告書掲載用の図面の作成、トレース作業を行った。調査で撮影した写真は番号を付して登録作業を行った。

遺物は、個別の遺構の他、遺物包含層や近世以降の攪乱からも多く出土しており、遺物の出土状況には時期的な傾向がみられた。標高の高い南半では古代の遺物が多く、土師器の椀・皿、須恵器の杯・壺、緑釉陶器碗、黒色土器の椀、灰釉陶器の碗などが出土し、標高の低い北半では中世の土師器の皿・製塩土器・羽釜、青磁の碗などが出土している。また特徴的なものとして、古墳時代のハソウの完形品や古代銭貨の「貞観永寶」も出土している。当該期における周辺の土地利用を想定する上での重要な成果と言えよう。（森原　聖）

古墳時代のハソウ

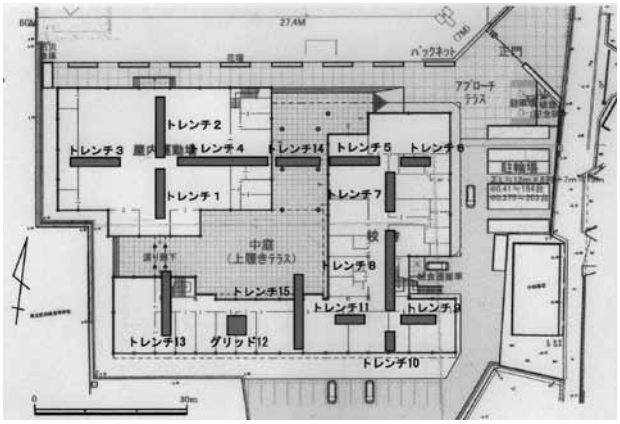
小松原Ⅱ遺跡（湯川氏館跡）の確認調査

遺跡の時代：弥生時代～室町時代
所　在　地：御坊市湯川町小松原
調査の原因：湯川中学校改築
調 査 期 間：2012.06 ～ 2012.07
調査コード：12-24･024

小松原Ⅱ遺跡は、ＪＲ御坊駅付近から紀央館高等学校・湯川中学校付近にかけて広がる遺跡で、日高川右岸に形成された自然堤防上の標高約５ｍに位置する。周辺は、当地方で遺跡が最も集中する地域であり、弥生時代以降、各期を通じて日高地方の中枢を占めてきた。また、中世には、寺院が存在したことが窺え、室町時代になると日高地方を拠点として有田・牟婁地方にも勢力を及ぼした湯川氏の館が築かれる。

中学校が改築されるのに伴い、屋内運動場・校舎建設予定地に計15箇所のトレンチとグリッドを設定し、調査をおこなった。総面積は302㎡である。

調査の結果、削平をかなり受けているものの、弥生時代中期の土坑や柱穴、古代と考えられる土坑、中世の区画溝・土坑、近世の土坑などを検出した。また、南側には湯川氏館の庭園を構成する池が存在し、東端には館の東堀の存在が予想できる。対象地が全国屈指の規模をもつ方形居館の南東部に相当すると判断でき、全面に埋蔵文化財が展開していると判断できたことから、記録保存を目的とした本発掘調査が、平成25年度に行われることになっている。　（川崎　雅史）



調査区

名勝和歌の浦三断橋整備事業

遺跡の時代：江戸時代
所　在　地：和歌山市和歌浦
調査の原因：橋の解体修理
調 査 期 間：2012.09~2013.03

和歌山市に所在する名勝和歌の浦は平成22年8月に国記念物（名勝）に指定された、玉津島神社を中心とする約90万㎡の広大な地域である。その中の重要な構成要素である妹背山三断橋は和歌山県内最古の石橋で、紀州藩初代藩主徳川頼宣が妹背山を整備した慶安４年（1651）頃までに建設され、中国の景勝地である杭州西湖の六橋の面影があるといわれ、独特の意匠・構造を持つ。欄干、敷石、橋桁、橋脚は何度か補修されているが、橋の原形は、崩れることなく今日まで400年間継承されている。三断橋は、台風の被害等により壊れていたが、平成24年度妹背山三断橋修理事業として修理した。

三断橋は、全長が約40mもあり、三つの橋で構成されている。中央部の橋は、最も高くて大きく、二列の橋脚があり、両側の橋は、中央部に比べて小さくて低く一列の橋脚である。不老橋は19世紀のアーチ型の石橋であるが、三断橋も横から見るとアーチ型を意識したように見える。整備は、原則必要範囲のみの部分解体を行い、出来るだけ現状の石を再利用した。また石橋の解体に伴い内部構造がどうなっているのか調査した。内部の構造は、上部は昭和の時期の山土で修復され、下部は裏込に拳大の川原石、内側には片岩を用いていることが判明した。　（渋谷　高秀）

三段橋竣工（南西から）

国宝　長保寺大門ほか2棟の保存修理

建 築 年 代：鎌倉時代後期、南北朝時代
所　在　地：海南市下津町上
修理の種類：半解体修理・屋根葺替修理
修 理 期 間：2011.01 ～ 2012.12

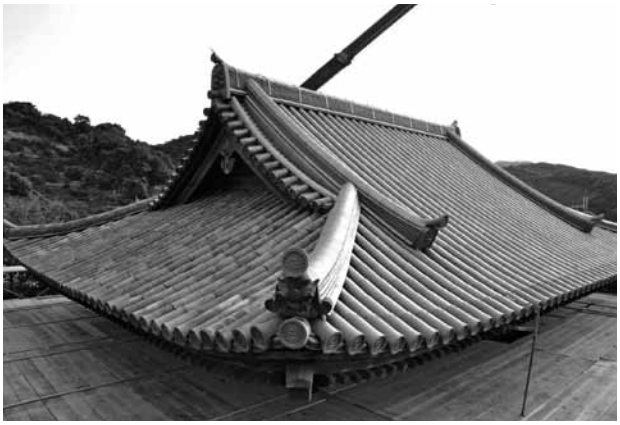
事業の概要

海南市下津町の長保寺では、平成23年1月より国宝の大門・多宝塔、重要文化財の鎮守堂の3棟で屋根葺き替え・部分修理の補助事業を開始し、同24年9月に工事完了、同年12月に事業完了を迎えた。前年度で各建物の野地修理と補足瓦の製作、多宝塔の相輪修理、鎮守堂の屋根葺き直しが終了しており、本年度は大門と多宝塔で屋根瓦の葺き直しの他、左官工事や塗装工事、各建物の素屋根解体などを実施した。

大門

大門は桁行３間、梁間２間の楼門で、屋根は入母屋造・本瓦葺き、嘉慶２年（1388）建立の建物で、明治44年（1911）に解体修理されている。

土居葺きまでを終えた大門では、瓦葺きを行った。瓦葺きは従来の土葺きから、屋根重量の軽減を図って空葺き下地に変更した。屋根瓦は明治期の解体修理で全体の半数近く、軒瓦では8割近くが新調されていたが、耐用年数に達したものも少なくなかった。また、平瓦の寸法(9.7寸)に対する葺足(5寸)が甘く、今回の修理では4寸に改めた。古瓦は東西妻面に集めて再用した。その他、土壁の漆喰塗り直しや壁板の胡粉塗り直し、土間叩きなどを行い、工事は竣工した。



大門屋根の竣工状況（北東より見る）

多宝塔上層屋根の竣工状況（南東より見る）

多宝塔

正平12年（1357）建立の多宝塔では、前年度施工の土居葺きに続いて、屋根瓦の葺き立てと相輪の組み付け、亀腹の漆喰塗り直し、縁板の部分補修を行った。

瓦葺きは大門と同じく空葺き工法を採用した。修理前の相輪は、昭和３年の解体修理時の記録や古写真などから、部材の一部が欠失していることが確認できたため、昭和３年竣工時の姿に整えた。

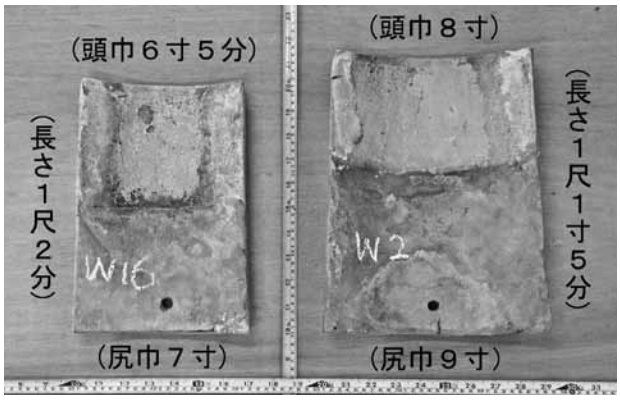
鎮守堂

鎌倉後期建立とされる鎮守堂は、一間社流造、檜皮葺の建物である。修理工事は昨年度中に完了していたが、別途整備事業として実施された、史跡地内における建物周辺の樹木剪定作業時の養生にもなることから、素屋根解体を多宝塔と合わせて行った。

大門・多宝塔での瓦調査

大門、多宝塔は近代に解体修理を受けて来ているが、いずれも中世期の瓦が良く残されている。今回の事業での調査は、寸法・形状・胎土・技法等の各面から

鎮守堂の竣工状況（南西より見る）



長保寺大門の屋根に使用されていた大小の平瓦
調査の結果、右が本堂所用当初瓦、左が多宝塔下層所用当初瓦と判明した。

比較検討を行い、また、類例調査として県下の指定建造物の瓦類も同様に調査した。その結果、多宝塔、大門いずれの建物でも、建立時に新調された瓦に加えて、それよりも古い瓦も多く使用されたことが判明した。

上記を含めた瓦調査に関する記録は、今後の紀州の中世期瓦研究の基礎資料となるよう、事業で刊行した修理工事報告書に可能な限り掲載した。

中世末期の焼失により、文字資料などで十分な確認ができなかった長保寺伽藍内の指定建造物に関して、それらの建立時の様相の一端を、瓦の製作状況や使用状況からうかがい知れたことは収穫であった。将来の解体修理における解明の一助となることを期待したい。

（下津　健太朗）

長保寺大門の建立当初比定軒瓦の組み合わせ

重要文化財
琴ノ浦温山荘主屋ほか２棟の耐震診断

建 築 年 代：大正時代
所　在　地：海南市船尾
事業の種類：耐震診断
修 理 期 間：2012.6 ～ 2013.3

琴ノ浦温山荘園は、大正時代に実業家新田長次郎が海を臨む景勝地に造営した広大な庭園である。長次郎はこの敷地に配する建物の計画を自ら立案したといわれ、数多くの建物が今も残る。このうち主屋、浜座敷、茶室が平成22年に重要文化財に指定されている。

温山荘園においては、国指定名勝の庭園とあわせて全体の整備計画が進められており、文化財指定を受けた建造物においては、当文化財センターも参画し保存活用計画の策定が進められている。

平成25年度から浜座敷の修理工事が進められる予定であり、この計画にあわせ指定建造物の耐震診断事業を和歌山県内では初めて国庫補助事業をして実施した。主屋と茶室は海岸部の脆弱な造成地に立地しており、通常より高度な時刻歴応答解析を採用した。

構造解析に伴う地盤調査を実施したところ、予想に反して主屋では地下約10メートルで安定した地盤面が確認できるなど、当初の配置計画が周到になされていたことをうかがわせる結果が出た。しかし解析を進めたところ、近代和風建築の特徴である壁が少なく開放的な空間構成が仇となり、各建物の主室部分が必ずしも十分な耐力を有しているとはいえない判定結果となった。このため、あわせて構造補強計画案も策定し、建物の補修時に歴史的建物としての価値を損なうことなく、利用者の安全を図れるよう備えた。（多井　忠嗣）

潮入りの池に面する主屋

重要文化財　金剛三昧院客殿及び台所ほか1基の保存修理

建 築 年 代：江戸時代前期
所　在　地：伊都郡高野町高野山
修理の種類：半解体修理・屋根葺替
修 理 期 間：2008.1~2013.3

竣工写真・客殿及び台所

平成20年1月より工事期間60ヶ月、事業期間63ヶ月で行ってきた修理事業がすべて完了した。今年度は主に多宝塔の屋根葺き替えを行い、併せて客殿及び台所の外構整備や設備類の復旧を行った。

多宝塔の修理に際して初層内部の状態を確認したところ、小動物が侵入している形跡があり、一部に破損がみられた。そこで破損被害の状況確認を行ったところ、折上小組格天井の蛇骨子裏板が数箇所で破損或いは外れている状態であった。一方、その他には大きな被害は見られなかった。当初より多宝塔に関しては木工事を始めとする解体修理は計画になかったこともあり、今回は小屋内より行える範囲での蛇骨子裏板の補修、留め直しに留めることとした。また、小動物の進入経路と目される上下層の内法長押と壁板間の隙間を、長押上に仮設的な伏せ板を設けることで塞ぎ、今後の対策とした。補修を進める際に判明した事項であるが、初層側柱が四天柱と比べて全体的に垂下しており、柱間の開きも確認された。また、天井板留め釘（洋釘）の多くが錆びて爆裂した状態であった。以上より、喫緊に修理を要する状態ではないものの、近い将来に部分解体修理以上の修理が必要な状態であると判断した。

桧皮屋根は多層建築で頻繁に見られる、上層からの雨落ち部分での下層屋根の摩耗が顕著であったが、その他の平葺き部分は葺き替え時期に至ってはいるものの、概ね良好な状態であった。下層雨落ち部分には前回の葺き替え時（昭和54年）に摩耗対策として棕櫚皮が葺き込まれていることが資料により知られていたため、その効果を検証した。その結果、一定程度の役割を果たしていることが確認できたため、今回の施工でも棕櫚皮を葺き込む仕様とし、さらに調査により判明した改善点を反映した納まりとした。

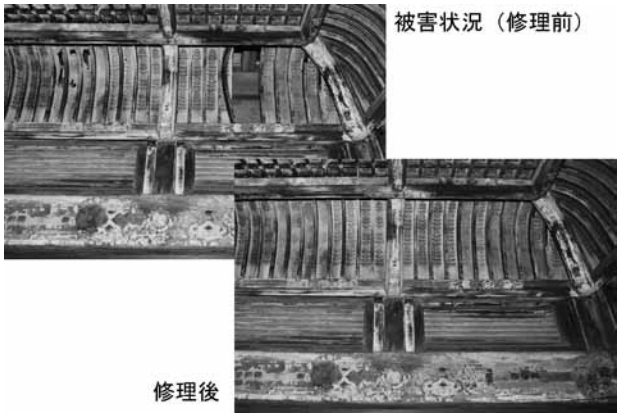
屋根葺き替えと並行して、上層亀腹の漆喰上塗り直しを行った。

初層正面（西）板唐戸に取り付く四葉金具が風化により原型を留めない状態であったことから、他面の金具を参考に補足金具を製作した。また、相輪に取り付く風鐸にも欠失が確認されたため、これを補足した。

客殿及び台所は、外周の縁下土間叩きや、避雷針及び火災報知設備類の復旧、電気、ガス等の復旧工事を行った。

多宝塔工事完了後、素屋根を解体し、資材置き場の撤去を行い、全ての工事が完了した。　（結城　啓司）

多宝塔の桧皮葺き状況（上層）



多宝塔内部の獣害と修理後

重要文化財　丹生都比売神社本殿の保存修理

建 築 年 代：室町時代、江戸時代中期、明治時代
所　在　地：伊都郡かつらぎ町上天野
修理の種類：屋根葺替・部分修理
修 理 期 間：2013.1~2014.12

当事業は平成25年1月から平成26年12月までの24ヶ月間の工期で、丹生都比売神社本殿４棟の屋根葺替工事と塗装修理工事及び、第二殿の軸部建て起こし工事を行う。今年度は仮設の組立と第二殿修理の準備、桧皮の購入などを行った。

一間社春日造の本殿4棟は境内の奥まった位置に北面して、向かって右側より第一殿から順に並び建つ。建立年代は第二殿、第四殿が文明元年（1469）、第一殿が正徳５年（1715）、第三殿が明治34年（1901）と判明しており、400年以上の時代差があるものの規模や外観に大きな差異はなく、一見違いを感じさせない。本殿の内部には鎌倉期建立の本殿（現存せず）と同時期に製作された宮殿4基がそれぞれ残されており、附指定となっている。

近代以降の修理履歴では、明治32年に大風で本殿裏の木が倒れて第三殿が大破し、同34年に再建されたことが知られる。同時に第二殿の軒廻りも破損しており、小屋組を含め修理が施された。また、規模は不明ながら４棟共に彩色に手が加えられている。その後、昭和６年に部分的な修理が行われ、昭和40年に重要文化財に指定された。文化財指定後は、昭和52年に屋根葺き替えと塗装修理が行われている。

修理前の社殿

第一殿、第二殿共通で素屋根を建設した

今回は桧皮屋根が葺き替え年限に達していることから全面葺き替えを行う。前回修理時に剥落止めと一部補筆が行われた彩色部分も剥落やカビの繁殖が進んでいるため、カビの除去と剥落止め及び補筆を行う。第二殿に関しては、事業着手前の破損調査により柱の傾斜が顕著であり、放置すると危険な状態と判断されたため、部分的な解体のうえ、建て起こし及び不陸の調整を行うこととした。軸部に歪みが生じた原因としては、明治32年の被害による影響があると考えられる。

修理工事は２棟ずつ分けて行い、24、25年度で第一殿、第二殿の修理を実施する。事業着手にあたっては、第一殿、第二殿の遷座を行った後、素屋根の建設に取り掛かった。仮設工事では他に、資材置き場を建設した。また、並行して遣り方や番付打ちなど木工事の準備を進めた。

次年度では、当年度でやり残した素屋根の建設を済ませ、桧皮の解体、木部の修正及び補強、彩色の剥落止め及び補筆、桧皮の葺き上げの順に工事を進める予定である。また別事業として本殿を取り囲む鳥居・玉垣木柵の修理が行われる予定である。　（結城　啓司）

剥落が進む彩色（第二殿身舎正面）

国史跡　熊野本宮大社神門ほか4棟の保存修理

建 築 年 代：明治中期、昭和初期
所　在　地：田辺市本宮町本宮
修理の種類：屋根葺替修理・部分修理
修 理 期 間：2012.06 ～ 2014.03

事業の概要

熊野三山の一つである熊野本宮大社は、明治22年（1889）の水害を受けて、同24年に旧社地である大斎原から現在の高台の地へ遷座された。境内には流失を免れて移築されて来た、上四社に相当する第一殿・第二殿、第三殿、第四殿の3棟が西から一列に並び、その社殿を瑞垣と各社殿前に構えられた鈴門で囲む。第三殿の正面前方には神門が開かれ、その両脇に築地塀が接続する。神門の西側には拝殿、さらにその西側には神饌所が建つ。社殿3棟は平成7年に国の重要文化財に指定されており、上記建物群で構成される境内地も平成14年に国史跡に指定され、平成16年にはユネスコの世界遺産にも登録されている。

平成22年6月より平成24年3月の22ヶ月間にわたって、社殿3棟の桧皮屋根葺き替えを中心とした保存修理工事が行われた。それに引き続く形で、平成24年度と25年度では、「熊野三山史跡等・登録記念物・歴史の道保存整備事業」として、史跡地内の建造物の保存修理工事を行っている。平成24年度は、神門と築地塀、神饌所の3棟で、屋根葺き替えと破損箇所の補修を実施した。

神門の竣工状況（南より見る）

神饌所の竣工状況（南西より見る）

神門・築地塀

神門は３間１戸の八脚門で、屋根は切妻造・桧皮葺の建物である。社殿とともに大斎原での東門を移築・改造したものと伝えられており、小屋組内には転用古材も確認できる。今回の修理では桧皮屋根の葺き直しと野地の補修、壁板や扉廻り、鬼板下地など破損箇所の補修、飾り金具の金箔捺し直しを行った。

築地塀は、明治の遷座時は本瓦葺であったが、戦後に銅板葺へ改められている。その際に新調された野地は健全であり、今回は屋根銅板の葺き直しを行った。

神饌所

神饌を調える神饌所は、桁行8.86m、梁間5.68m、切妻造・銅板葺、背面に一部下屋庇を設けた建物で、棟札より昭和5年（1930）の建築になる。軸部は健全だが、屋根銅板の破損により雨漏りを来たしていた。今回の修理では、屋根銅板の葺き直し、野地や軸部足元廻りの破損箇所の補修、壁の部分補修を行った。

今後の予定

平成25年度には社殿まわりの鈴門・瑞垣の保存修理工事を行い、史跡地内の建造物の保存・整備事業がひと通り完了することになる。　　（下津　健太朗）

神門・築地塀の竣工状況（北西より見る）

重要文化財　熊野那智大社第一殿ほか7棟の保存修理（災害復旧）

建 築 年 代：江戸時代
所　在　地：東牟婁郡那智勝浦町那智山
修理の種類：災害復旧
修 理 期 間：2012.4 ～ 2012.12

熊野那智大社は、平成23年９月４日、台風12号による土砂災害により重要文化財建造物全てが被災した。しかし平成23年度中に境内地の土砂が全て取り除かれ、同２月には建造物本体の修理工事に着手した。本年度は傾斜した第五殿の建て起こし及び足もとの補強、倒壊した瑞垣の木部組立、檜皮葺工事を実施し、社殿は内法長押以下、鈴門及び瑞垣は全面の塗装を塗り直して工事を完了した。

膨大な土砂の量を思うと、各建物の破損は驚くほどに軽微であり、瑞垣の倒壊部分においても大半の木材は再用出来た。今回の修理作業に伴う調査により、これらが偶然ではないことも確認できた。那智大社は昭和９年の室戸台風でも被災しており、本殿の背面石垣

倒壊から復旧した御県彦社周辺瑞垣

が大きく崩壊している写真が残る。今回は一部が破損したのみであったが、破損部から前回の復旧時に石垣裏にコンクリート製擁壁が設けられていることが確認できた。また瑞垣にもコンクリート基礎が打たれ、柱等が鉄鋼製の金具で補強されていたことが被害を最小限にとどめたと考えられる。一方で同時期に補修されている第五殿の床下部分では、一旦多くの部材が取り外されたことが確認できたが、ほとんどの部材が再用されており、当時から現在の文化財修理と同様の修理方法が採られていたこともわかる。当時の復旧に携わった技術者たちの真摯な対応の成果である。（多井）

国史跡　熊野那智大社東門ほか２棟の保存修理（災害復旧）

建 築 年 代：昭和初期
所　在　地：東牟婁郡那智勝浦町那智山
修理の種類：災害復旧
修 理 期 間：2012.9 ～ 2013.3

世界遺産　熊野那智大社東門石階段周辺の保存修理

建 築 年 代：昭和初期
所　在　地：東牟婁郡那智勝浦町那智山
修理の種類：解体修理
修 理 期 間：2013.2 ～ 2013.3

重要文化財建造物の事業と並行し、これらと連続する内庭の通用口や瑞垣、東門の災害復旧工事を国指定史跡の補助事業として、そして東門周辺の石階段や土間の補修を世界遺産緊急保全事業として実施した。

土砂による被害により、各建物で軸部が傾斜し、土台など足もとの部材が流失するなどの破損が顕著であった。特に東門は地盤沈下に加えて長期間土砂に埋

完成した東門、内庭北通用周辺

没していたことにより腐朽が進み、東西の柱で最大９㎝もの高低差が生じていた。参道の要所として多数の参詣者が利用するため、早期の修理が望まれていた。那智大社境内から青岸渡寺に直接通じる唯一の経路であるため、工事中も参詣用通路を確保しつつ、東門親柱の根継工事をジャッキアップによる現地施工とするなど、施工範囲がいたずらに広がらないよう留意し、的確な修理が効率よく実施できるよう計画した。

もっとも参詣者の目に触れる部分の修理が当事業で完了し、境内地は名実ともにほぼ完全に復旧した。

（多井　忠嗣）

県指定文化財　深専寺庫裡の技術指導

建 築 年 代：文政13年
所　在　地：有田郡湯浅町湯浅
修理の種類：部分修理
修 理 期 間：2012.7 ～ 2013.3

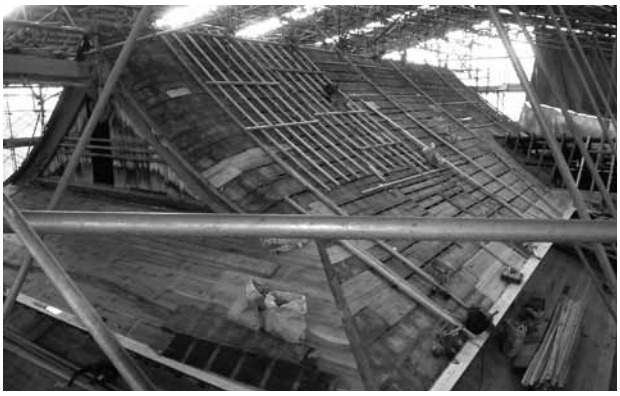
深専寺は伝建地区にもほど近い湯浅町中心部に位置し、本堂、惣門、庫裡、書院が県指定文化財に指定されている浄土宗寺院である。

平成23年９月の台風12号とその後の地震により庫裡の本瓦葺屋根の大棟が崩れ、県の補助事業として災害復旧が行われたことに合わせ木部の修理を実施した。

東面北端取り合い部で漏水による小屋組の腐朽が進んでいたが、その他に大きな破損や虫害部分はなく、屋根の野地に至るまで当初の状況が良く残されていた。

このため解体は必要最低限とし、補強も建物本来の空間構成を損なうことがないよう留意した。結果耐震壁の増設や小屋組にダンパーを取り付けたが、西側座敷部分や開放的な土間部分には外観上の影響が生じず、適切な補強を施すことが出来た。この他、土間脇の廊下や建具類など近年改変されていた部分を復旧した。

（多井　忠嗣）



深専寺庫裡　当初野地板を残しての修理状況

竣工した旧葛城館内部

登録文化財　火伏医院の技術指導

建 築 年 代：主屋（享保6年・1721）
　　病院棟(大正10年・1921)
所　在　地：橋本市橋本
修理の種類：屋根葺替・部分修理
修 理 期 間：2012.4 ～ 2013.3

曳屋工事や主屋の軸部などの補修を行った平成23年度からの継続事業として、本年度は屋根工事や左官工事、建物の内装にかかわる工事を実施した。大正期より開業している病院棟は、修理後も現役の病院として活用される予定であり、必要な諸設備を整備するとともに、内装を含め本来の状況を可能な限り残すよう指導した。今回の事業は市街地再開発に伴うものであり、周囲の景観も一変してしまったが、病院棟のモダンな外観は重厚な主屋と相まって、現役の病院として親しまれるだけでなく、地域の歴史を語り継ぐ象徴的な存在となるであろう。

（多井　忠嗣）

登録文化財　旧葛城館の技術指導

建 築 年 代：明治時代
所　在　地：橋本市高野口町名倉
修理の種類：部分修理
修 理 期 間：2012.4 ～ 2013.3

旧葛城館は、JR和歌山線高野口駅前に建つ、木造三階建ての旅館建築である。各階正面にはガラス障子が配され、非常に開放的で明朗な建物である。

旅館としては既に廃業しているが、近年に屋根瓦を葺き替え、建具類も当時のものが数多く残るなど、全体としては良好な状況で維持されていた。しかし駅が線路に沿って東斜面上に位置していることにあわせ、旧葛城館も傾斜地を造成して建てられており、地盤沈下が顕著な状態で各階で大きな不陸が生じていた。

今回の修理は、背面側に居住棟を隣接して新築することもあり、活用等に伴う改変は限定的で、不陸修正と耐震壁の増設などによる構造補強を主眼としたものとし、内装などは原則現状を維持する形で施工した。

解体の範囲が限られ、完全に不陸を解消することはできなかったが、建物が持つ本来の雰囲気を損なうことのない修理となった。

（多井　忠嗣）

資料紹介

弥生時代前期の弓矢
―立野遺跡で出土した弓の構造について―

紀伊の弓

紀伊の古代史を代表する道具の一つに「弓矢」があげられる。散逸してしまった『紀伊風土記』に、紀伊国のどのような姿が描かれていたのか今となっては知る由もないが、その断片が２つだけ残されている。「あさもよし」と「手束弓」で、万葉集抄秘府本では「手束弓（たづかゆみ）トハ、紀伊國ニ有リ。風土記二見タリ。弓ノトツカ（手束）ヲ大ニスル也。其ハ紀伊國ノ雄山ノセキ守ノ持弓也トソ云ヘル」とある。紀伊の関守がもつ特別に持ち手部分を大きくした弓のようであり、おそらく紀伊ゆかりの弓なのであろう。

弓は木製で腐朽してしまうため、紀伊ゆかりの弓といえば、井辺八幡山古墳で出土した人物埴輪が持つ小弓が、最も古いものであった。立野（たちの）遺跡の弓はここからさらに、700 ～ 800年遡る貴重な弓の実例である。

流路での出土状況

今年度実施した立野遺跡の整理事業では、弥生時代前期中段階の流路から出土した木製品を整理し、保存処理を行っている。これらの木製品は類例の非常に少ない時期のものであるうえ、樹種選択と木取り方法に特徴があり、全国的に注目を集めている。立野遺跡では、立木から直接辺材を剥がして木製品の原材を獲得しているらしく、イスノキ製の横木取り材を用いた鍬やクスノキ製の各種容器といった在地色の強い製品が多数作られている。弥生時代前期は農耕が開始され、狩猟具にも変化が生じたことが予想される時期である。ここでは、報告書の記述よりやや詳しく、現状の理解を示しておくこととする。

なお、立野遺跡の流路で出土した、明確に弓と判断できる資料はすべてイヌガヤ製であり、当該時期の標準的な樹種選択といえる。６点が樹皮巻きで漆塗りの製品で、うち１点が完存し、２点が上端、１点が中央、３点が下端とみられる破片である。他の２点は単純な丸木弓、あるいは飾り弓の未成品の可能性がある資料である。このほか、マキ属の弓状の棒も出土しているが、自然木である可能性も高く積極的に評価し難い。

樹皮巻き漆塗りの弓の構造

１は立野遺跡で出土した完形品の弓で、長さは現状で約125㎝、直径約2.6㎝。断面は中央が円形で端部にいくと楕円形となる。イヌガヤ製で、側面に年輪の縦縞が確認できることから割材削り出しと考えられるものである。(i) 弓には補強のために幅４㎜前後の針葉樹樹皮を弓幹に巻きつけ先端を差し込む。黒漆とみられるものを樹皮の上から塗っており、一部では樹皮巻きの剥離痕の上にも付着している。

この弓は弦を外すと、弦を張って使用する時の状態と逆向きに反る、湾弓と呼称されるものと考えられる。使用時に弦を張る内湾面となる側を弓腹といい、外面となる側を弓背という。

弓腹には棒樋（ぼうひ）という浅い溝が施されることが知られており、１では使用時と逆に反っていることが考えられる。棒樋は形象埴輪の表現から、古代でも使用時に内湾する側に施されていたものと考えられている。また、１の左の側面図の下端凸状部をみると、弓を引いた際の弦の引っ張られる方向は斜め上方と考えられ、(ii) 棒樋の見解と一致する。

次に、弓の上下であるが、日本の弓は上長下短といって、手で持って構えたときに、手の上が長く、手の下が短くなる特徴がある。矢を番（つが）える場所は上から３分の２ないし５分の３であり、バランスをとるため自然と、上部は緩やかに伸び、下部は比較的短い距離で湾曲しておさまる形状となる。このような傾向はいわゆる『魏志倭人伝』の記述「木弓短下長上」や、銅鐸の絵画でも同様であることが知られている。

１をみると、図のように上下を配すると、上が長く伸び、下が彎曲しておさまるものと思われる。この場合、上端（末弭＝うらはず）が尖り、下端（本弭＝もとはず）が凸状となる。本弭は両側面側を溝状に削っていることから、弦の一端をここに結び、弦のもう一方に弦輪を作り、弓をしならせて、先端を尖らせた末弭に嵌めるのではなかろうか。

現在の和弓は構えた時に上下両端が少し右に曲り、矢が弓幹（ゆがら）の右側（右利きの場合顔から遠い方）を通過するように作られている。１は弓幹中央部の棒樋を正面

に向けた場合、下端は右側にねじれ、上端は左手前側に曲っている。これを若干修正して、棒樋全体が正面に来るような置き方をすると、末弭の曲りは弦の方向に曲る形状となり、矢は弓幹に接触せずに右側を通過する状態になるものと考えられる。

この弓とともに出土した樹皮巻き漆塗りの弓片では、先端が尖るものが２点、先端を有頭状に加工するものが４点ある。立野遺跡では末弭と本弭を作り分けていると考えてよいであろう。

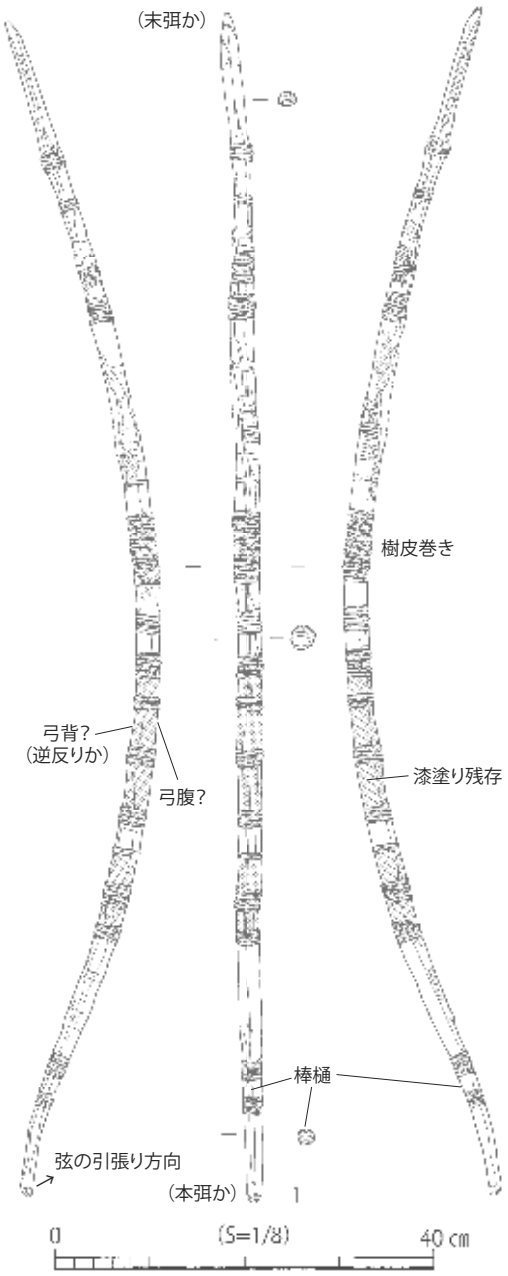
その他の弓矢関連資料

２は元の樹皮の残る丸木弓、ないし製作途中品と考えられるもので、同様の資料がもう１点ある。胴部は原木のままほとんど削らず、下端は径が太くなり、弓腹の右側と手前側を削っていることが分かる。弓弭と棒樋を１と同様に配置した場合、２の弓では使用時と同じ方向に彎曲するが、その彎曲は小さく直線的で、弦は弓幹の右側を通るものと思われる。２は弦を外しても２のように逆反りしない直弓と判断される。

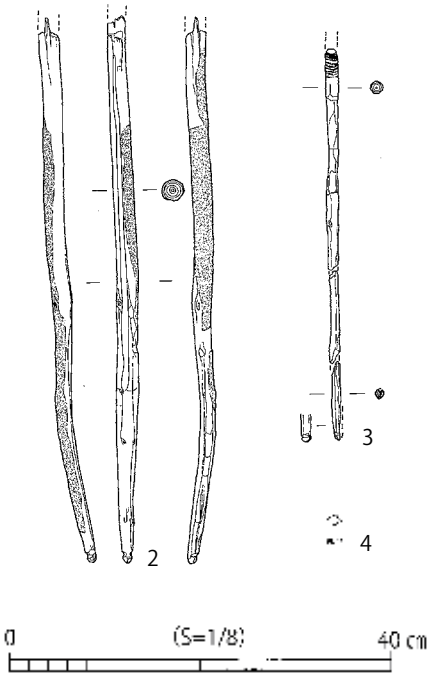
３は径1.3㎝、長さ41㎝以上のサカキ製の棒状製品である。一端は半分に割れた有頭部となり、他端の破片には弓と同様の樹皮を巻きつけ、漆とみられる黒い光沢が付着している。東大阪市鬼虎川遺跡出土の石鏃の付いた矢と比較すると、石鏃をはさんで緊縛固定していない、使用前の状態の製品と考えられる。

このほか、弓・矢と共通する樹皮で巻いた製品に、４の指輪状製品があり、弓矢の関連品の可能性が考えられる。弓弭部に差し込むと比較的奥まで入り、小指から人差し指では指の付け根まで、親指では第一関節まで入る程度の大きさの製品である。

なお、立野遺跡では、弓８点と矢状の製品１点に対して、同時期の石鏃は５点しか出土せず、獣骨も出土していない。調査地は弓矢の製作地であったと考えられ、これらの弓矢は基本的に未使用の製品であったものと考えておきたい。　（丹野　拓）



立野遺跡の弓矢実測図１



立野遺跡の弓矢実測図２

注（ｉ）　森林総合研究所の能城修一氏他教示
注（ii）　吉田生物研究所の汐見真氏教示

那智山坊跡出土の銭貨

はじめに　那智山坊跡は、世界文化遺産として登録される熊野那智大社・青岸渡寺下方の山斜面に階段状に造成された宿坊跡で、実方院や現在でも宿坊として名を残す尊勝院などが手広く経営をおこなっていた。その歴史は、少なくとも古代末頃に遡り、参詣者の宿泊所や休憩所として賑わいをみせた。

発掘調査は駐車場建設に伴うもので、1988年に確認調査、1989年に本調査が実施された。調査区は青岸渡寺の北約100mで、遺跡の中では最も高所に位置する。山斜面をカットして前面に石垣を築き、敷地を造成したもので、調査前の現状は畑や山林となっていた。調査面積は300㎡で、古代末から近世にかけての宿坊を構成する建物跡が検出された。遺物には、常滑焼、渥美焼、山茶碗、備前焼、瓦器、土師器、中国製陶磁器、伊万里焼、瓦、硯、石鍋、銅製品、銭貨等があり、中でも山茶碗が多量に出土している。

発掘調査の成果は、平成23年度に実施した和歌山県緊急雇用創出事業臨時特例基金事業に係る埋蔵文化財関連資料整理の概要報告書に所収した。ただ、紙面の制約もあって銭貨の報告を割愛していたため、ここで紹介したい。

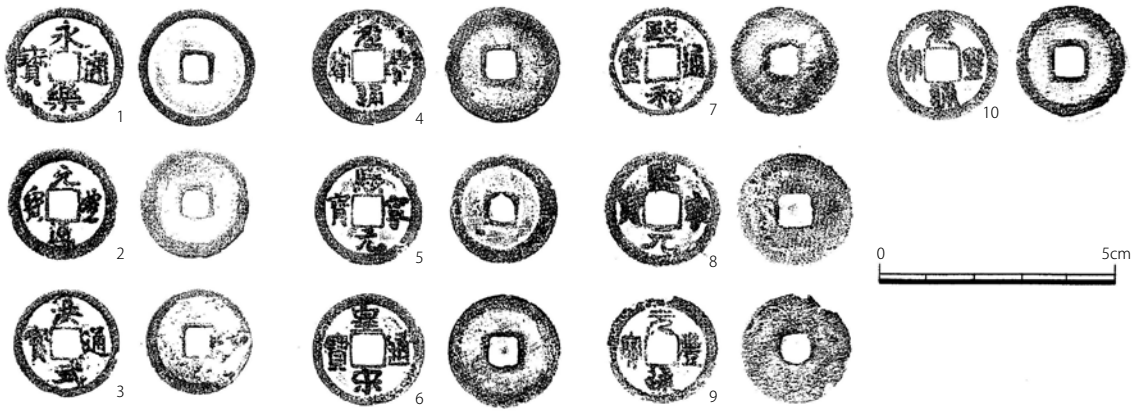
出土銭貨　確認調査で出土したものを含め42枚の出土がある。銭種が明らかなものについては、寛永通宝が12枚、中国銭が11枚ある。また、一部確認できる文字から中国銭と判断できるものが５枚、銭種が不明でも、出土遺構・層位から中国銭と判断できるものが12枚あり、中国銭は計28枚以上出土していることになる。中国銭で銭文が一部でも判読できるものは一覧表の通りで、北宋銭と明銭とがある。

評価として　平安時代後期から戦国時代までは、中国との貿易を通じて流入した北宋・南宋や明の貨幣がそのまま国内の貨幣として流通した。城館や寺社・町屋などからの出土が多く、那智山坊跡からの出土した28枚の中国銭も、面積に比しては多い出土数である。中国製陶磁器や東海地方の陶磁器が多く出土する背景には、朝廷・貴族の庇護をうけた熊野三山の勢力が窺え、消費活動が活発に行われていたことが想定できる。

（川崎　雅史）

那智山坊跡出土の中国銭（銭文が判読できるもの）

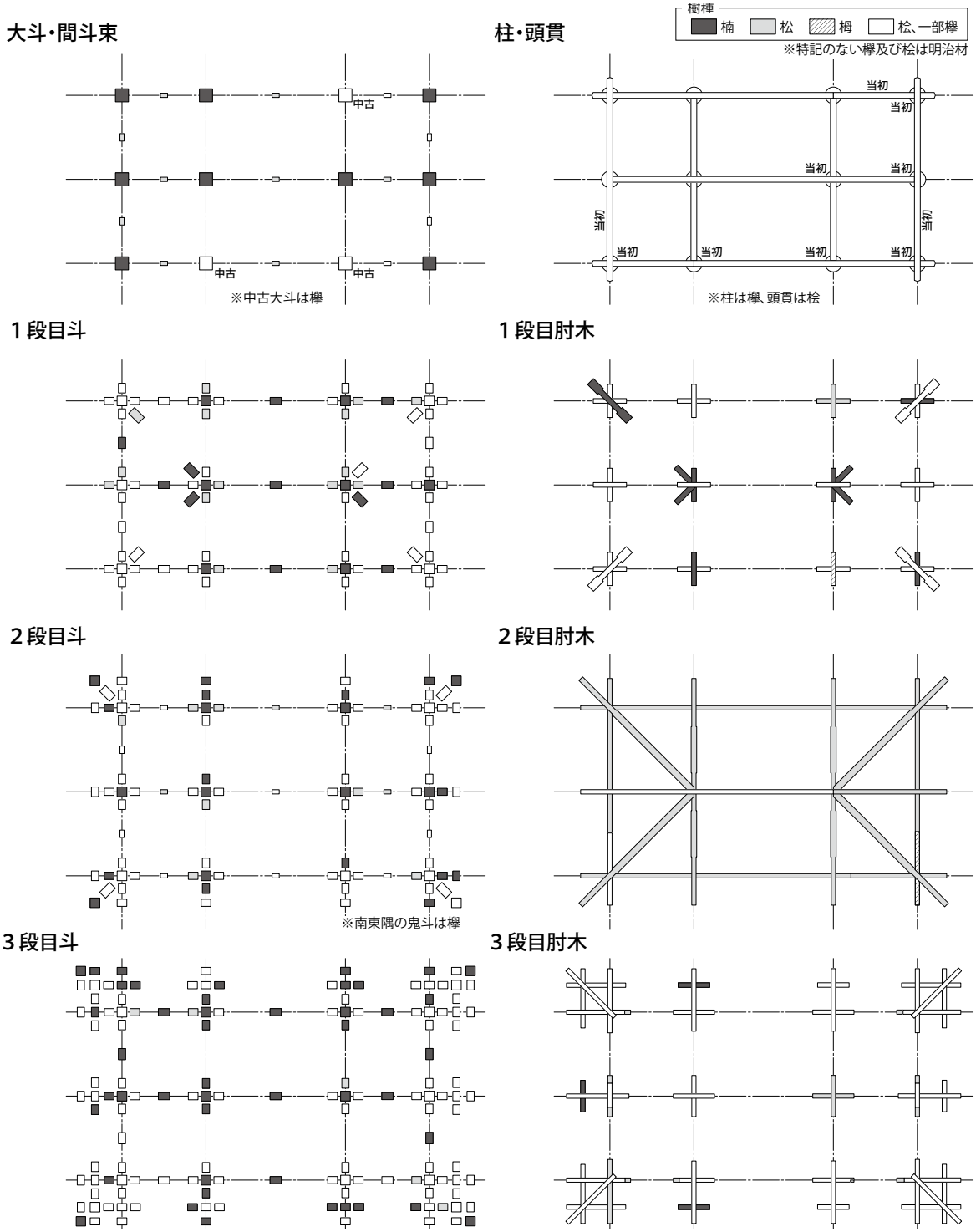
番号	銭種	年度	地　区	遺　構	層　位	日　付	登録番号	大きさ(mm)			孔(mm)		縁(mm)	備　考
								縦	横	厚さ	縦	横		
1	永楽通寶	88	第2トレンチ第3区		黒色土上層	880909	37-024	25.5	25.3	1.5	6.4	6.4	2.2	明　(1403年)
2	元豊通寶	88	第2トレンチ第3区		黒色土上層	880909	37-024	24.2	24.1	1.2	6.1	6.1	2.6	北宋(1078～1085年)　真書
3	洪武通寶	88	第2トレンチ第3区		黒色土上層	880909	37-024	23.2	23.1	1.6	5.9	6.6	1.7	明　(1368～1398年)
4	元豊通寶	88	第1トレンチ6区		撹　乱　土	880902	31	25.0	24.7	1.2	6.8	6.7	3.3	北宋(1078～1085年)　篆書
5	熙寧元寶	89		pit79		890825	37-004	23.6	23.5	1.5	6.2	6.2	2.5	北宋(1068年)　真書
6	皇宋通寶	89		pit198		890920	244	24.3	24.3	1.3	6.8	6.8	1.9	北宋(1039～1053年)　真書
7	政和通寶	89		遺構面直上	黒灰色土	890901	37-005	23.6	23.7	1.2	6.3	6.2	2.2	北宋(1111～1117年)　真書
8	熙寧元寶	89			黒灰色土	890809	37-009	25.0	25.0	1.1	7.6	7.5	2.6	北宋(1068年)　真書
9	元豊通寶	89	北端東西トレンチ			890807	37-001	23.8	23.8	1.5	7.1	6.9	3.0	北宋(1078～1085年)　篆書
10	元豊通寶	89	北端東西トレンチ			890807	37-001	24.1	24.0	1.3	6.8	6.8	2.5	北宋(1078～1085年)　篆書
11	大観通寶	89			黒灰色土	890809	37-009							北宋(1107～1110年)
12	□元通寶	88	全域		表　採	880909	47							
13	元□通寶	89			黒灰色土	890809	37-009	24.8	24.7	1.6	6.2	6.5	2.0	
14	元□通寶	89			黒灰色土	890809	37-009	25.0	25.3	1.5	6.1	6.0	2.3	
15	□元通寶	89		pit19		890819	37-010	24.8	24.9		7.8	7.8	2.6	
16	□元通寶	89		pit19		890819	37-010							



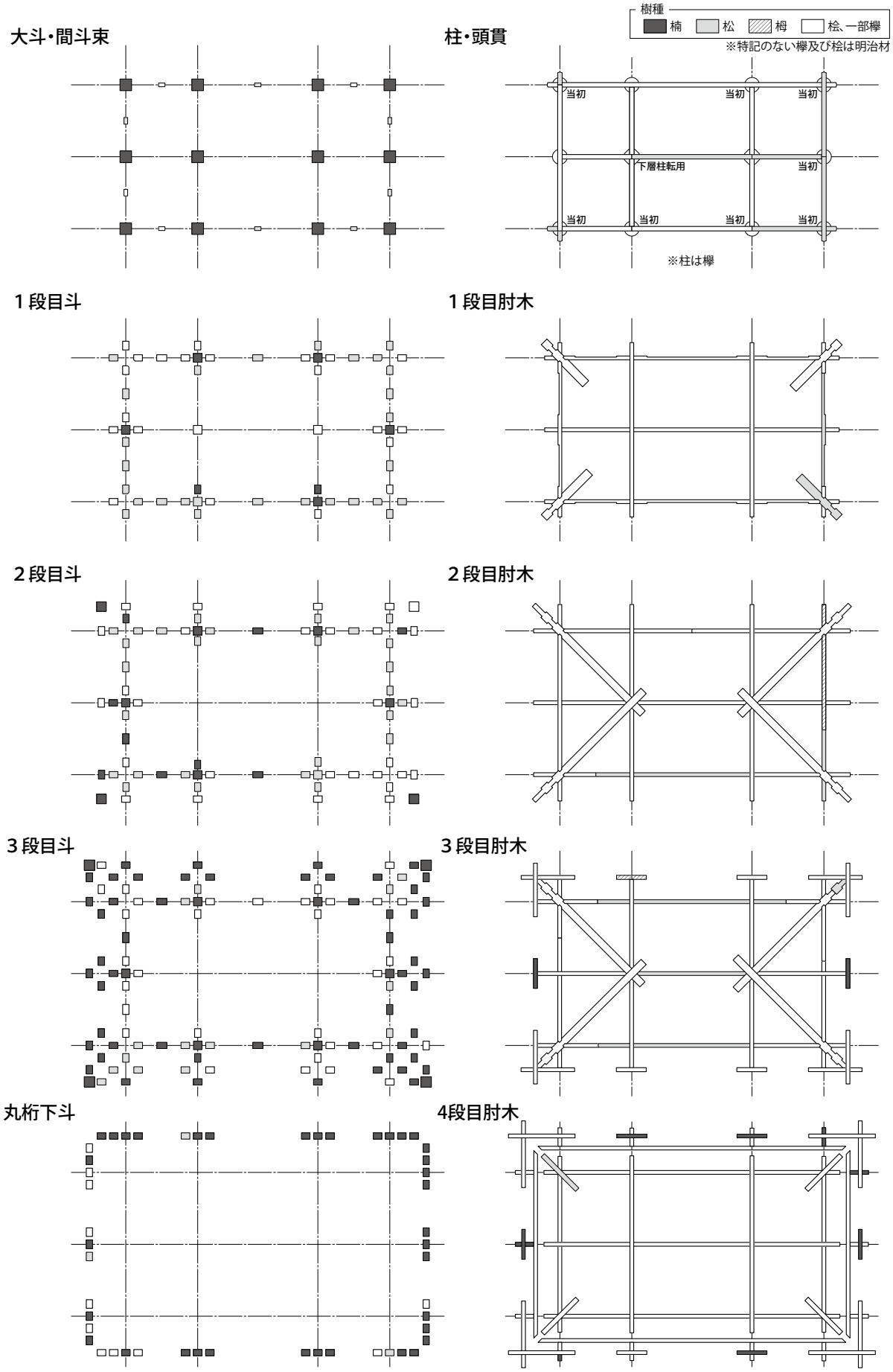
長保寺大門での樹種分類について

14世紀末建立の長保寺大門には、化粧材に当初材が多く残っている。それらの樹種を分類すると、柱にはケヤキ、下層頭貫はヒノキ、上層頭貫はマツ、大斗や方斗、隅行肘木などはクス、通肘木や尾垂木はマツ、巻斗は下半がマツ中心、上半がクス中心、軒支輪・垂木・茅負など軒廻り材はヒノキとなる。

これらを機能的にみてみると、荷重を多く負担する部材にはケヤキやクスなどの広葉樹を、長尺材にはヒノキやマツなどの針葉樹を使い分けていることが読み取れる。ケヤキの代わりにクスを多用する点は、同寺多宝塔でも共通するなど、和歌山の地域的特色の一つと言える。（下津　健太朗）



長保寺大門の軸部・組物の樹種分類（下層）



長保寺大門の軸部・組物の樹種分類（上層）

平成24年度の普及啓発事業

シンポジウム・報告会
「地宝のひびき」
「道成寺の謎に迫る」
「農耕社会成立期の木工」―立野遺跡を考える―
現地見学会
「歩いて知るきのくに歴史探訪４－慈尊院と高野山町石道－」
「田ノ口遺跡・富田小学校、北富田小学校現地見学」
発掘調査現地説明会
「和田遺跡・平井Ⅱ遺跡・田ノ口遺跡・岩崎大泓遺跡・妹背山三断橋修理事業監理及び調査・根来寺遺跡（京奈和２次）」
報告書掲載写真のデジタル化及び既刊報告書の電子書籍化

はじめに

平成24年度の普及啓発事業として埋蔵文化財関係では12件の事業を実施した。シンポジウム、報告会、現地見学会は国庫補助金を受けて和歌山市及び道成寺で実施した。県内の各発掘調査現場において６件の現地説明会・現地公開を実施した。

情報誌「風車」の刊行の他、各事業において資料集や地図等を作成し、参加者及び関係機関に配布し、好評を得た。

文化財報告会「地宝のひびき」

地方のひびき発表風景１

平成24年６月24日に和歌山県立図書館（きのくに志学館）２階講義研修室において、前年度の県内発掘調査の成果を広く県民の皆様に知って頂くために、調査成果報告会と題して開催した。

発表は、「大古Ⅱ遺跡・安宅本城跡の発掘調査」川崎雅史（（公財）和歌山県文化財センター）、「旧吉備中学校校庭遺跡の調査成果と新知見」川口修実（有田川町教育委員会）、「田屋遺跡第6次調査の成果－古墳時代の集落と微地形－」藤薮勝則（（公財）和歌山市文化スポーツ振興財団）、「高野山開創1200年記念大法会記念事業 伽藍中門再建事業に伴う国史跡金剛峯寺境内発掘調査報告及び再建工事中間報告」鳥羽正剛（高野山真言宗総本山金剛峯寺高野山開創1200年記念大法会事務局）、「京奈和自動車道建設に伴う根来寺遺跡の発掘調査」井石好裕（（公財）和歌山県文化財センター）で、参加者は59名であった。

地方のひびき発表風景２

現地見学会「歩いて知るきのくに歴史探訪」

平成24年10月20日「歩いて知るきのくに歴史探訪－慈尊院と高野山町石道－」を開催した。慈尊院周辺の文化財古絵図マップを片手に往時を偲びつつ高野山参詣道入り口から町石道を散策した。

歩いて知るきのくに歴史探訪説明風景

高野山大学図書館木下浩良氏を講師に迎え、町石道の歴史や役割、町石についての説明を交えたお話を聞きながら慈尊院周辺を巡った。

発掘調査現地説明会

遺跡の発掘調査の成果を県民の方々に知っていただくため、各調査現場において、遺構説明や出土遺物の展示などを行い現地説明会を開催した。現地説明会及び現地公開を開催した遺跡は以下の通りである。

平井Ⅱ遺跡（９月29日）、田ノ口遺跡（11月４日）、岩崎大泓・岩崎大泓Ⅱ遺跡（1月30日～ 2月1日）、和田遺跡（２月９日）、根来寺遺跡（京奈和２次）（２月16日）。

田ノ口遺跡では近隣の富田小学校（85名）と北富田小学校（56名）の現地見学会を開催した。遺跡の説明をおこなった後、検出された遺構を図や写真を用い説明した。また、出土遺物を展示して、その用途や産地などについての説明も行った。

報告書掲載写真のデジタル化及び既刊報告書のデータ化

（公財）和歌山県文化財センターの既刊報告書に掲載されている遺跡写真フィルムの劣化防止と公開活用のため、一昨年、昨年とデジタルデータとして保存を進めている。今年度は1995年度から1999年度までの当センターの既刊報告書５冊に掲載されている計308枚の写真フィルムについて作業を実施した。また、昨年度から既刊報告書の電子書籍化を行なっており、1987年度から1994年度までの44冊について実施した。

平井Ⅱ遺跡現地説明会風景

平井Ⅱ遺跡展示遺物説明風景

富田小学校・北富田小学校現地見学風景

岩崎大泓・岩崎大泓Ⅱ遺跡現地公開遺物説明風景

和田遺跡現地公開風景

妹背山三断橋現地説明会風景 1

妹背山三断橋現地説明会風景 2

文化財建造物に関する普及事業

平成24年度は、職員が常駐する文化財建造物保存修理現場であった長保寺と金剛三昧院を中心に、求めに応じて現場見学会等の開催に協力した。日常では見る機会の少ない修理現場を見ていただき、文化財保存修理についての理解を深めていただくことに努めた。

「見て知る伝統技術」

財団法人和歌山県文化財保護協会の主催で毎年行っている文化財公開事業である。23年度は熊野本宮大社の社殿修理現場の見学を計画していたが、台風12号による災害のため中止となった。２年ぶりの開催となった今年度は、県教育委員会、高野町教育委員会と当センターの共催として、金剛三昧院の修理現場で９月29日に実施した。

今回は、修復を終えた客殿及び台所のほか、国宝の多宝塔で桧皮屋根の葺き替え作業を見学して貰った。

修理現場公開の開催協力

金剛三昧院では「見て知る伝統技術」の他に、文化財関係の現場研修会や高野山大学図書館文化講座など、一般の方々から専門家まで多岐にわたる方々に、現場見学時の解説などを実施した。

熊野本宮大社では２月９・10日の両日に、修復中の神門の修理現場を公開した。連休中で天候にも恵まれ、多くの参拝者で賑わう中での開催となった。修理用の仮設足場での見学となるため、1回につき20人程度の入れ替え制としたが、事前の告知を知らずに参拝に来られた方々からの希望も反映し、7回140名の予定を大幅に上回る200名以上の参加となった。

今年度は桧皮葺き屋根の葺き替えが多かったこともあって修理現場の見学もそれに関するものが多い傾向となった。現場では桧皮や竹釘を手に取って貰ったり、職人の作業を間近に見て貰うことを通して、桧皮葺き屋根への理解を深めて貰えたのではないかと思う。

「見て知る伝統技術」（金剛三昧院）

熊野本宮大社での修理現場公開

（公財）和歌山県文化財センター平成24（2012）年度概要

Ⅰ　受託業務

埋蔵文化財発掘調査等受託業務	14件
埋蔵文化財遺物整理等受託業務	5件
埋蔵文化財確認調査監理受託業務	2件
文化財建造物保存修理技術指導業務	16件

Ⅱ　理事会・調査委員会・会議など

理事会・評議員会

理事会	24.05.29	アバローム紀の国
評議員会	24.06.21	アバローム紀の国
理事会	25.03.27	アバローム紀の国

調査委員会

24.08.24　平井Ⅱ遺跡発掘調査、立野遺跡出土遺物整理、井辺・神前遺跡出土遺物整理、神前遺跡出土遺物整理

25.02.18　立野遺跡出土遺物整理、井辺・神前遺跡出土遺物整理、神前遺跡出土遺物整理

現地調査指導

出土木器研究会	24.07.21、07.22	立野遺跡
樹種同定及び木取り確認指導 （森林総合研究所：能城修一） （早稲田大学文学学術院：佐々木由香） （京都大学総合博物館：村上由美子）	24.08.01-24.08.03	立野遺跡

全国埋蔵文化財法人連絡協議会関係

第33回全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会	24.06.21・22	主催：（公財）千葉県教育振興財団
平成24年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会	24.11.8-9	主催：（公財）富山県文化振興財団

近畿ブロック主担者会議等

平成24年度　第1回（45回）全国埋蔵文化財連絡協議会近畿ブロック主担者会議	24.07.06	主催：（公財）長岡京市埋蔵文化財センター
第27回全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック事務担当者会議	24.11.02	主催：（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
第18回近畿ブロック埋蔵文化財研修会	24.11.22	主催：（公財）大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
平成24年度　第２回（46回）全国埋蔵文化財連絡協議会近畿ブロック主担者会議	25.02.08	主催：（公財）大阪府文化財センター
平成24年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議	25.02.15	主催：（公財）枚方市文化財研究調査会
近畿二府三県法人調査組織 第1回実務者会議	25.02.22	主催：（公財）大阪府文化財センター
平成24年度全埋協近畿地区OA委員会	24.06.29	主催：（公財）滋賀県文化財保護協会
平成24年度第2回全埋協近畿地区OA委員会	25.01.25	主催：（公財）滋賀県文化財保護協会
「関西・考古学の日 2012」スタンプラリー	24.09.01-24.11.30	主催：「関西・考古学の日」実行委員会 （全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック）

文化財建造物課関係

平成24年度重要文化財建造物保存修理事業等監督者会議	24.04.16	主催：文化庁
平成24年度文化財建造物保存事業幹部技術者研修会	24.04.17	主催：（公財）文化財建造物保存技術協会
平成24年度文化財建造物保存事業中堅技術者養成研修	24.06.25- 28,07.02-05	主催：（公財）文化財建造物保存技術協会
「重要文化財建造物保存修理工事主任技術者承認基準」改正に係る説明会	24.09.06	主催：文化庁
平成24年度文化財建造物保存修理関係者等連絡協議会	24.10.09	主催：文化庁
平成24年度文化財建造物保存事業主任技術者研修	24.10.10-11	主催：（公財）文化財建造物保存技術協会

委員委嘱

川崎　雅史　御坊市文化財保護審議会	24.04.01-25.03.31	
川崎　雅史　みなべ町文化財保護審議会	24.04.01-25.03.31	
村田　　弘　紀の川市文化財保護委員会	24.04.01-25.03.31	
村田　　弘　名手本陣保存整備委員会	24.04.01-25.03.31	
小田誠太郎　田辺市立美術館協議会・作品選定委員会	24.11.05	田辺市立美術館
多井　忠嗣　旧西村家住宅保存活用計画策定委員会	25.02.21	新宮市教育委員会

Ⅲ　講師派遣・執筆など

講師派遣等

埋蔵文化財課関係

川崎　雅史	「すさみ町立野遺跡の発掘調査成果　ー弥生時代前期の木製品製作地ー」 第15回近畿弥生の会滋賀場所	24.06.30	草津市立まちづくりセンター
丹野　　拓	「那賀郡・名草郡における古代寺院の創建」古代寺院史研究会	24.07.16	和歌山県立紀伊風土記の丘
渋谷　高秀	南部老人大学	24.09.19	みなべ町公民館
川崎　雅史	紀伊弥生文化の実像「紀南の弥生時代」	24.10.27	和歌山県立美術館
丹野　　拓	第18回シンポジウム 「古代のかつらぎとみやこ ー紀ノ川流域の古代寺院と地方官衙」	24.11.18	かつらぎ町総合文化会館
丹野　　拓	「紀伊の牧」紀伊考古学研究第15号		
丹野　　拓	「和歌山県」『日本考古学年報』第63号（2010年度版）日本考古学協会	24.05.20	
丹野　　拓	「紀伊の古墳と古代寺院の考古学的研究（博士論文）関西大学提出	24.11.30	

文化財建造物課関係

小田誠太郎　講演「再発見！世界遺産『紀伊山地の霊場と参詣道』の価値」 ー平成24年度世界遺産保存管理事業「世界遺産セミナー熊野古道と文化的景観」ー	24.06.10	於：三重県度会郡大紀町
結城　啓司　文化財建造物特別公開―見て知る伝統技術―	24.09.29	於：金剛三昧院
多井　忠嗣・結城　啓司　修理現場見学（かつらぎ町文化財研究会）	24.11.07	於：金剛三昧院
多井　忠嗣・結城　啓司 修理現場見学（平成24年度和歌山県文化財保護指導委員研修会）	24.11.10	於：金剛三昧院
結城　啓司　修理現場見学（平成24年度第3回高野山大学図書館文化講座）	24.11.21	於：金剛三昧院
小田誠太郎　特別講演会「和歌山県の世界遺産」	24.11.27	於：京都橘大学
下津健太朗　熊野本宮大社神門修理現場公開	25.02.09-10	於：熊野本宮大社

結城　啓司	「重要文化財金剛三昧院客殿及び台所ほか一基-多宝塔桧皮屋根・下層雨落ち部分の現状-」『文建協通信NO.110』	24.10
多井　忠嗣	「重要文化財熊野那智大社第一殿（滝宮）ほか七棟-台風十二号土砂災害からの復旧-」『文建協通信NO.110』	24.10
下津健太朗	「国宝長保寺大門ほか二棟-多宝塔および大門の建立当初の屋根瓦について-」『文建協通信NO.110』	24.10

Ⅳ　刊行図書・出版物等

年報

『公益財団法人　和歌山県文化財センター年報　2011』	24.05.28 発行

埋蔵文化財課関係

調査報告書等

『田屋遺跡ー大和紀伊平野農業水利事業に伴う発掘調査報告書ー』	25.02 発行
『和田Ⅱ遺跡ー県道御坊由良線道路改良事業に伴う発掘調査報告書ー』	25.03 発行
『井辺遺跡ー都市計画道路湊神前線道路改良工事に伴う発掘調査報告書ー 』	25.03 発行
『立野遺跡ー近畿自動車道紀勢線事業に伴う発掘調査報告書ー』	25.03 発行
『片山遺跡ー南部高校クライミングウォール新築工事に伴う発掘調査報告書ー』	25.03 発行
『名勝和歌の浦妹背山三断橋整備事業報告書』	25.03 発行

現地説明会等資料

「平井Ⅱ遺跡」現地説明会資料	24.09.29 発行
「田ノ口遺跡」現地説明会資料	24.11.04 発行
「岩崎大泓・岩崎大泓Ⅱ遺跡」現地公開資料	25.01.30 発行
「和田遺跡」現地公開資料	25.02.09 発行
「根来寺遺跡」（京奈和２次）現地公開資料	25.02.16 発行
「名勝和歌の浦　妹背山三断橋修理」現地説明会資料	25.02.24 発行

報告会・シンポジウム資料

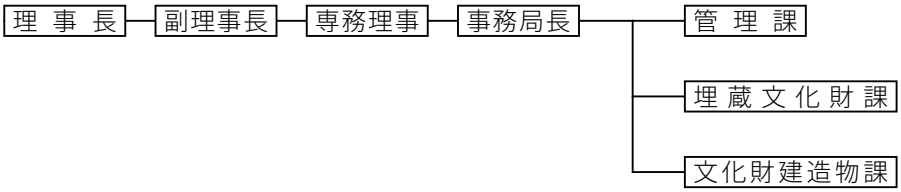
『地宝のひびき　―和歌山県内文化財調査報告会―』発表資料集	24.06.24 発行
『歩いて知るきのくに歴史探訪　～慈尊院と高野山町石道～』古地図で歩く慈尊院周辺文化財マップ	24.10.20 発行
『道成寺の謎に迫る』講演会資料	24.11.23 発行
公開シンポジウム『農耕社会成立期の木工　―立野遺跡を考える―』資料集	25.02.23 発行

埋蔵文化財と文化財建造物のミニ情報誌　（公財）和歌山県文化財センター通信『風車』

第 59 号　特集「和歌山城跡の発掘調査」	24.06.30 発行
第 60 号　特集「神前遺跡・井辺遺跡の出土遺物」	24.09.28 発行
第 61 号　特集「文化財建造物竣工特集」	24.12.28 発行
第 62 号　特集「和田遺跡の発掘調査」	25.03.25 発行

Ⅴ　組織

組織図



役員（理事）

理　事　長	森　　郁夫	帝塚山大学　名誉教授
副 理 事 長	西下　博通	和歌山県教育委員会　教育長
専 務 理 事	小堀　基二	元　和歌山県労働委員会　事務局長
理　　事	工楽　善通	大阪府立狭山池博物館　館長
理　　事	櫻井　敏雄	元　近畿大学　教授
理　　事	鈴木　嘉吉	元　奈良国立文化財研究所　所長
理　　事	西川　秀紀	宗教法人　東照宮　代表役員
理　　事	林　　宏	社団法人　和歌山県文化財研究会　会長
理　　事	前田　孝道	宗教法人　護国院（紀三井寺）　代表役員
理　　事	水田　義一	和歌山県立紀伊風土記の丘　館長

役員（監事）

風神　正典	税理士・風神会計事務所　代表
喜多　英夫	和歌山県教育庁生涯学習局　局長

評議員

井藤　　徹	元　日本民家集落博物館　館長
小野　俊成	宗教法人　道成寺　代表役員
加藤　容子	元　和歌山県教育委員会　教育委員
佐々木公平	宗教法人　広八幡神社　代表役員
千森　督子	和歌山信愛女子短期大学　教授
川端　真理	和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課　課長
中野　一三	和歌山県立紀伊風土記の丘　副館長
府中　恵理	和歌山県立博物館　副館長
山陰加春夫	高野山大学　名誉教授
和田　晴吾	立命館大学　教授

職 員

事務局長

渋谷　高秀

管理課

主　　査	松尾　克人
副　主　査	出口由香子

埋蔵文化財課

課　　長	村 田　　弘
課 長 補 佐	井石　好裕
主　　任	土井　孝之
主　　任	佐伯　和也
副　主　査	丹野　　拓
任期付職員	川崎　雅史
任期付職員	寺西　朗平

任期付職員	津村かおり
専門調査員	森原　　聖
専門調査員	山野　晃司（24.10.01 ～）
専門調査員	久貝　　健（24.11.01 ～ 25.02.15）

文化財建造物課

主　　査	多井　忠嗣
副　主　査	小田誠太郎
技　　師	下津健太朗
技　　師	結城　啓司
技術補佐員	田村　收子

表紙図案	表紙右上	平井Ⅱ遺跡出土　初期須恵器（器台）
	表紙左下	左：国宝金剛三昧院多宝塔　相輪　（縮尺50分の1）
		右：国宝長保寺多宝塔　相輪　（縮尺50分の1）
	裏表紙	国宝長保寺大門　建立当初比定軒瓦　拓影

公益財団法人
和歌山県文化財センター年報
2012

2013 年 6 月 4 日

【発行】
公益財団法人 和歌山県文化財センター

〒640-8404 和歌山市湊 571-1
TEL 073-433-3843
FAX 073-425-4595

http://www.wabunse.or.jp/
E-mail: maizou-1@wabunse.or.jp

【印刷】
白光印刷株式会社

（公財）和歌山県文化財センター
http://www.wabunse.or.jp